

# 有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2018年4月1日
(第53期)	至	2019年3月31日

## 西菱電機株式会社

兵庫県伊丹市藤ノ木三丁目5番33号

(E05262)

# 目 次

頁

## 第53期 有価証券報告書

### 【表紙】

第一部 【企業情報】	1
第1 【企業の概況】	1
1 【主要な経営指標等の推移】	1
2 【沿革】	3
3 【事業の内容】	4
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	8
第2 【事業の状況】	9
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	9
2 【事業等のリスク】	11
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	13
4 【経営上の重要な契約等】	18
5 【研究開発活動】	18
第3 【設備の状況】	19
1 【設備投資等の概要】	19
2 【主要な設備の状況】	19
3 【設備の新設、除却等の計画】	20
第4 【提出会社の状況】	21
1 【株式等の状況】	21
(1) 【株式の総数等】	21
(2) 【新株予約権等の状況】	21
(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】	21
(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】	21
(5) 【所有者別状況】	22
(6) 【大株主の状況】	22
(7) 【議決権の状況】	23
2 【自己株式の取得等の状況】	24
3 【配当政策】	25
4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	26
(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】	26
(2) 【役員の状況】	30
(3) 【監査の状況】	34
(4) 【役員の報酬等】	36
(5) 【株式の保有状況】	37
第5 【経理の状況】	38
1 【連結財務諸表等】	39
(1) 【連結財務諸表】	39
(2) 【その他】	64
2 【財務諸表等】	65
(1) 【財務諸表】	65
(2) 【主な資産及び負債の内容】	75
(3) 【その他】	75
第6 【提出会社の株式事務の概要】	76
第7 【提出会社の参考情報】	77
1 【提出会社の親会社等の情報】	77
2 【その他の参考情報】	77
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	78

## 監査報告書

## 【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年6月27日
【事業年度】	第53期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	西菱電機株式会社
【英訳名】	SEIRYO ELECTRIC CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 西井 希伊
【本店の所在の場所】	兵庫県伊丹市藤ノ木三丁目5番33号 （同所は登記上の本店所在地で実際の業務は「最寄りの連絡場所」で行っております。）
【電話番号】	該当事項はありません。
【事務連絡者氏名】	該当事項はありません。
【最寄りの連絡場所】	大阪市北区堂島二丁目4番27号
【電話番号】	06（6345）4160（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 経営企画本部本部長 金井 隆
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所  （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

## 第一部【企業情報】

### 第1【企業の概況】

#### 1【主要な経営指標等の推移】

##### (1) 連結経営指標等

回次	第49期	第50期	第51期	第52期	第53期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (百万円)	22,046	20,738	20,630	20,722	22,251
経常利益 (百万円)	281	250	169	341	353
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	139	144	67	198	242
包括利益 (百万円)	240	△24	116	226	237
純資産額 (百万円)	5,104	4,939	4,915	5,002	5,141
総資産額 (百万円)	13,159	10,918	10,670	10,995	11,488
1株当たり純資産額 (円)	1,459.08	1,412.00	1,405.18	1,430.01	1,469.80
1株当たり当期純利益 (円)	39.75	41.23	19.32	56.75	69.37
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	38.79	45.24	46.07	45.50	44.76
自己資本利益率 (%)	2.74	2.87	1.37	4.00	4.78
株価収益率 (倍)	28.68	21.03	57.81	15.89	11.53
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	194	△84	△39	201	425
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△235	△188	△47	△199	△303
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△356	△201	△0	2	115
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	1,423	949	861	865	1,103
従業員数 (人)	548	605	594	585	618
(ほか、平均臨時雇用者数)	(213)	(222)	(222)	(245)	(273)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第49期	第50期	第51期	第52期	第53期
決算年月	2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高 (百万円)	18,220	16,865	16,841	16,762	17,027
経常利益 (百万円)	177	207	101	227	173
当期純利益 (百万円)	78	122	21	148	127
資本金 (百万円)	523	523	523	523	523
発行済株式総数 (千株)	3,500	3,500	3,500	3,500	3,500
純資産額 (百万円)	4,926	4,881	4,763	4,755	4,780
総資産額 (百万円)	12,120	10,036	9,882	9,995	9,939
1株当たり純資産額 (円)	1,408.35	1,395.45	1,361.67	1,359.53	1,366.50
1株当たり配当額 (円) (うち1株当たり中間配当額)	45.00 (20.00)	35.00 (15.00)	50.00 (20.00)	28.00 (10.00)	33.00 (10.00)
1株当たり当期純利益 (円)	22.31	35.08	6.12	42.54	36.44
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	40.65	48.64	48.20	47.58	48.09
自己資本利益率 (%)	1.57	2.50	0.44	3.13	2.67
株価収益率 (倍)	51.11	24.72	182.65	21.21	21.96
配当性向 (%)	201.7	99.8	817.6	65.8	90.6
従業員数 (人) (ほか、平均臨時雇用者数)	340 (57)	427 (155)	425 (150)	420 (162)	417 (167)
株主総利回り (%)	100.6	80.4	105.9	90.0	84.1
(比較指標：TOPIX) (%)	(128.3)	(112.0)	(125.7)	(142.7)	(132.3)
最高株価 (円)	1,300	1,445	1,295	1,349	1,020
最低株価 (円)	1,000	828	810	896	701

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第51期の1株当たり配当額には、記念配当15円（中間配当5円、期末配当10円）を含んでおります。

4. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所（市場第二部）におけるものであります。

5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を当事業年度の期首から適用しており、前事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## 2 【沿革】

1966年12月	大阪市淀川区において西菱電機株式会社を設立
1968年2月	三菱電機株式会社電子機器サービスデポに指定される
1969年9月	本社移転（大阪府豊中市）
1973年8月	三菱電機株式会社電子機器特約店となる
1976年1月	西菱電機販売株式会社を設立、営業部門を独立させる
1979年4月	神戸営業所（現 ネットワークシステム部）開設
1981年11月	本社移転（兵庫県伊丹市天津 現 兵庫県伊丹市藤ノ木）
1986年11月	資本金を4,176万円に増資
1987年4月	メディア事業所（現 通信システム部）開設
1992年6月	テレコム事業所開設
1992年11月	本社移転（兵庫県伊丹市中央）
1994年4月	株式会社ダイヤモンドテレコム（現 兼松コミュニケーションズ株式会社）携帯電話代理店となる
1994年12月	東京事業所（現 東京支社）を開設
1995年9月	西菱電機販売株式会社の営業権を譲受け、三菱電機株式会社代理店となる
1997年11月	本社移転（大阪府吹田市）
1999年3月	コムテックサービス株式会社を株式取得により100%子会社化 資本金を2億4,127万円に増資
2001年3月	テレコム事業所IS09002認証を取得
2001年11月	猪名寺事業所開設
2002年2月	株式会社大阪証券取引所市場第二部に上場 資本金を5億2,301万円に増資
2002年4月	大阪支社開設
2002年9月	本社移転（兵庫県伊丹市藤ノ木）
2003年4月	移動端末エンジニアリング事業部（現 テレコム事業部） IS09001認証を取得
2004年7月	大阪支社IS09001認証を取得
2004年11月	P Cデポ箕面店開設
2005年12月	情報通信システム事業部IS09001認証を取得
2006年1月	東京支社IS09001認証を取得
2008年1月	IS014001認証を取得
2008年9月	神奈川営業所開設
2010年4月	株式会社スズキエンジニアリング（現 西菱電機フィールディング株式会社）を株式取得により100%子会社化
2010年11月	情報通信ソリューション事業部ISO/IEC27001認証を取得
2012年1月	東日本端末修理センター開設
2012年12月	JISQ15001プライバシーマーク認証を取得
2013年4月	コーナン電子株式会社（現 西菱電機エンジニアリング株式会社）を設立
2013年7月	鳥取ケーイーシー株式会社（現 鳥取西菱電機株式会社）を株式取得により100%子会社化 株式会社東京証券取引所市場第二部に上場
2018年3月	本社事務所移転（大阪市北区）

### 3【事業の内容】

当社グループは、当社及び連結子会社4社（コムテックサービス株式会社、西菱電機フィールドディング株式会社、西菱電機エンジニアリング株式会社及び鳥取西菱電機株式会社）により構成されており、携帯情報通信端末の販売及び修理並びに映像を含む情報通信機器及びシステムの製作・販売・保守・運用を主な事業としております。

当社は、三菱電機株式会社より23.2%の出資を受けており、同社の関連会社であります。

当社グループの事業内容及び当社と関係会社・関連当事者の当該事業にかかる位置付けは、次のとおりであります。

なお、次の3部門は、「第5 経理の状況 1. (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

また、当連結会計年度より報告セグメントの区分を変更しております。詳細は、「第5 経理の状況 1. (1) 連結財務諸表 注記事項（セグメント情報等）」に記載のとおりであります。

#### (1) 情報通信端末事業

当セグメントの事業内容は、次の3つに大別されております。

##### a. 携帯情報通信端末の販売（直接店頭販売）

取扱機種並びに店舗は、以下のとおりであります。

(イ) 取扱機種（事業者）：ドコモ、a u、ソフトバンク、ワイモバイル、UQコミュニケーションズ

(ロ) 直営店数：13店舗（2019年3月31日現在）

[電気通信事業者指定店舗：専売店]

ドコモショップ……………6店舗

a uショップ……………6店舗

UQショップ……………1店舗

##### b. 携帯情報通信端末の修理再生

携帯情報通信端末の市場における不具合品の修理再生の受託業務を行っております。

##### c. パーソナルコンピュータ及び関連商品の販売及び修理・再生

新品、中古品のパーソナルコンピュータ及び関連商品を店舗で販売しております。

#### (2) 情報通信システム事業

当セグメントの事業内容は、次の4つに大別されております。

##### a. 官公庁向け情報通信機器及びシステムの販売並びに販売支援

官公庁向け情報通信機器及びシステムの販売並びに官公庁向け情報通信機器及びシステムに関する三菱電機株式会社の販売支援業務を行っております。

##### b. 民間会社向け情報通信機器及びシステムの販売

民間会社向けに情報通信機器及びシステムの販売を行っております。

##### c. 情報通信機器及びシステムの据付、保守、修理、運用等の技術サービス

当社及び三菱電機株式会社等が納入する情報通信機器及びシステムの調査、設計、検査、試験、据付、運用、保守、修理等の技術サービスの支援業務及び受託業務を行っております。

##### d. 無線通信機器及び制御盤等の開発、設計、製作並びに販売

民間会社向け無線通信機器及び制御盤の開発、設計、製作並びに販売を行っております。

#### (3) I o T事業

当セグメントの事業内容は、次の通りです。

##### a. I o Tを活用した各種製品及びサービスの提供

セグメント別の事業内容及び当社と関係会社・関連当事者の当該事業に関わる位置付けは次のとおりであります。

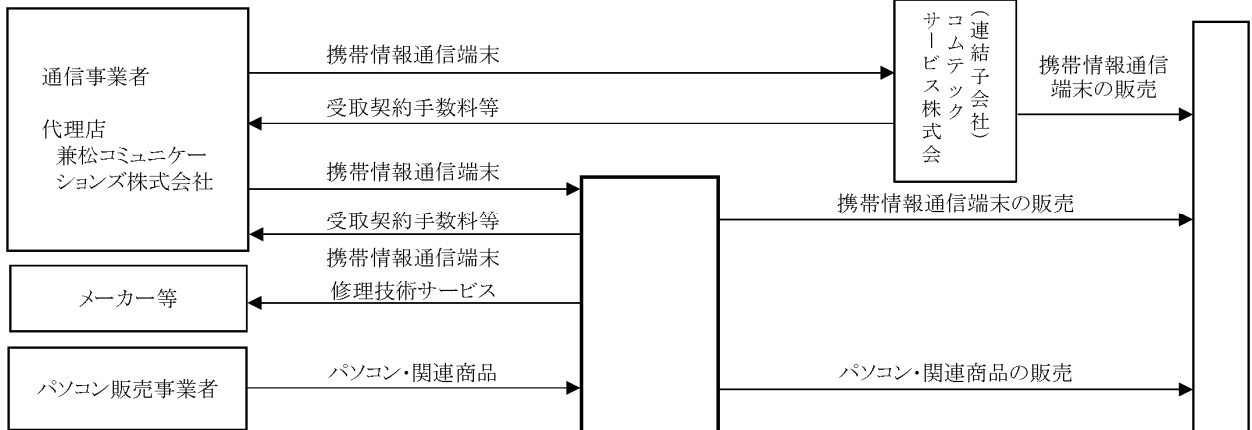
セグメントの名称	事業内容	会社名
情報通信端末事業	a. 携帯情報通信端末の販売 b. 携帯情報通信端末の修理再生 c. パーソナルコンピュータ及び関連商品の販売並びに修理再生	当社、コムテックサービス株式会社 当社 当社
情報通信システム事業	a. 官公庁向け情報通信機器及びシステムの販売並びに販売支援 b. 民間会社向け情報通信機器及びシステムの製作及び販売 c. 情報通信機器及びシステムの据付、保守、修理、運用等の技術サービス d. 無線通信機器及び制御盤等の開発、設計、製作並びに販売	当社 当社 当社、西菱電機フィールドディング株式会社 西菱電機エンジニアリング株式会社、鳥取西菱電機株式会社
I o T事業	a. I o Tを活用した各種製品及びサービスの提供	当社



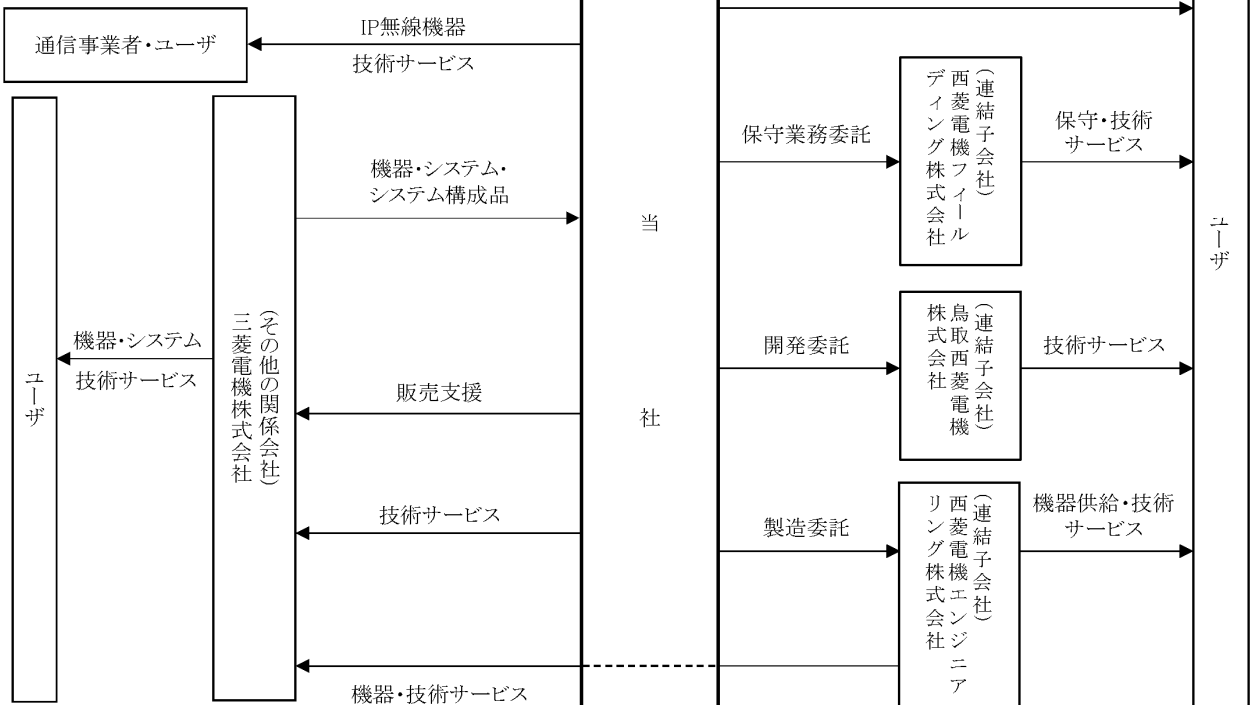
[事業系統図]

当社グループの事業系統図を示すと次のとおりであります。

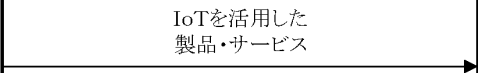
**情報通信端末事業**



**情報通信システム事業**



**IoT事業**



#### 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権の 所有割合 または 被所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社)					
コムテックサービス 株式会社	大阪市北区	50	情報通信 端末事業	直接 100.0	携帯情報通信端末の販売に関する 社員の出向、設備賃貸等を行って おります。 役員の兼任等あり。
西菱電機フィールドイ ング株式会社	横浜市西区	14	情報通信 システム事業	直接 100.0	情報通信機器及びシステムに関す る据付、保守、修理等の委託を行 っております。 役員の兼任等あり。
西菱電機エンジニアリ ング株式会社	兵庫県伊丹市	60	情報通信 システム事業	直接 100.0	無線通信機器及び制御盤に関す る開発、設計、製作並びに販売の委 託を行っております。 役員の兼任等あり。
鳥取西菱電機株式会社	鳥取県鳥取市	10	情報通信 システム事業	直接 100.0	無線通信機器に関する開発等の委 託を行っております。 役員の兼任等あり。
(その他の関係会社)					
三菱電機株式会社	東京都千代田区	175,820	電気機器の 製造及び販売	被所有 直接 23.2	同社製品の販売据付・修理・保守 点検・業務の受託を行うとともに 、同社製品の購入、据付・修理 の委託を行っております。 役員の兼任等あり。

- (注) 1. 連結子会社の主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。  
2. 西菱電機エンジニアリング株式会社は特定子会社であります。  
3. 三菱電機株式会社は有価証券報告書を提出しております。

## 5 【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

(2019年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数 (人)	
情報通信端末事業	156	(148)
情報通信システム事業	393	(113)
I o T 事業	6	(0)
全社 (共通)	63	(12)
合計	618	(273)

(注) 1. 従業員数は就業人員で、正社員と受入出向者であります。また、臨時雇用者数は ( ) 内に最近1年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 全社 (共通) として、記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分出来ない管理部門に所属しているものであります。

### (2) 提出会社の状況

(2019年3月31日現在)

従業員数 (人)	平均年齢 (歳)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (千円)
417 (167)	40.9	13.5	5,640

セグメントの名称	従業員数 (人)	
情報通信端末事業	121	(112)
情報通信システム事業	227	(43)
I o T 事業	6	(0)
全社 (共通)	63	(12)
合計	417	(167)

(注) 1. 従業員数は就業人員で、正社員と受入出向者であります。また、臨時雇用者数は、( ) 内に最近1年間の平均人員を外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 全社 (共通) として、記載されている従業員数は、特定のセグメントに区分出来ない管理部門に所属しているものであります。

### (3) 労働組合の状況

当社においては、2003年7月31日付にて労働組合が組織され「西菱電機労働組合」と称し、2019年3月31日現在の組合員数は372名であり、労使関係は円満に推移しております。

なお、連結子会社においては、労働組合はありませんが、労使関係は円満に推移しております。

## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1)経営方針

当社は、会社に係わるすべての人々との信頼関係を築き、情報通信ビジネスのOnly OneでNo. 1を目指すべく、8つの経営に係わる基本方針を掲げております。

- ① 私たちは、魅力ある製品・サービスを通して、感動と喜びをお届けします。
- ② 私たちは、グループ一体となって、「安心」と「信頼」の西菱品質をお届けします。
- ③ 私たちは、情熱を持って仕事に取り組み、家族や社会に誇れる会社を創ります。
- ④ 私たちは、グループのコミュニケーションを高め、活気ある会社を創ります。
- ⑤ 私たちは、企業価値を高め、永続的に成長・発展する企業を目指します。
- ⑥ 私たちは、すべての製品・サービスを通して、豊かで安心・安全・快適な社会の実現に取り組みます。
- ⑦ 私たちは、企業活動を通して、地域社会の発展と地球環境の保全に貢献します。
- ⑧ 私たちは、いかなる時も誠実に行動し、コンプライアンスを徹底します。

#### (2)経営戦略及び目標とする経営指標

当社グループは、「“One Seiryō” For New Value～西菱電機グループの総合力で世の中に新しい価値を～」をスローガンとした中期経営計画を策定し、「マーケット・顧客の拡大」「新規領域への展開・新規事業の創出」「事業競争力の強化」「人材の育成・組織体制の強化」の4つの基本戦略を軸に企業価値拡大に取り組んでまいります。

#### <情報通信端末事業>

##### ①ショップ運営事業

- a. 高い店舗運営力を武器に“お客様に選ばれる店舗づくり”を追求
- b. 店舗運営ノウハウをソリューションで新たな付加価値へ

##### ②リペアサービス事業

- a. 徹底した生産性の追求による事業競争力の確保
- b. キャリア、メーカー、業界に捉われないサービスプラットフォーム構築

#### <情報通信システム事業>

##### ①社会システム事業

- a. 長年培ったノウハウとワンストップの一貫体制を活用し、より安心・安全・快適な社会の実現に貢献する

##### ②通信システム事業

- a. 当社グループの「アプリケーション」「技術」「運用」「デバイス」などの資産と市場の多種多様な「技術」「デバイス」などを組み合わせ、最適なソリューションを提供
- b. 通信と映像を融合した新たなソリューション事業を創出する

##### ③サービス&サポート事業

- a. 様々な通信を取り扱う“通信の技術屋さん”から「通信を活かした運用支援、サービスを提供する付加価値事業」へ進化

#### <新規事業開拓>

##### ①通信サービス事業への進出

- a. 情報通信に係わる多彩な技術・ノウハウを保有していることを強みに新事業を創出

##### ②海外市場への進出

- a. 西菱電機グループのノウハウを武器に、“One Seiryō”を海外市場に

また、目標とする経営指標は以下の通りであります。

指標（連結）	目標（2021年3月期）
売上高	300億円
経常利益	10億円
ROE	10%以上

### (3) 経営環境

当社グループの関連する業界では、情報通信端末事業におきましては、スマートフォンの普及がひと段落し販売が鈍化する中、MVNO市場の拡大、中国製端末の伸長、政府による通信料金への言及に端を発した分離プランの主流化、5G導入など市場環境が大きな変革期を迎えています。情報通信システム事業におきましては、地震、台風、豪雨、豪雪などの自然災害の多発により、国民の安心・安全な暮らしを守る社会インフラの整備・強化が求められています。また、政府が成長戦略に盛り込む第4次産業革命が進んでおり、ビッグデータ、IoT、AI、ブロックチェーン、大容量通信などの新技術に注目が集まり、大きな発展が期待されています。

### (4) 事業上及び財務上の対処すべき課題

#### ① 事業規模拡大・収益力増強に向けた取り組み

当社グループは、中期経営計画で掲げる経営戦略のもと、各種システム開発、販売促進、新規市場・新規事業開拓などの投資を引き続き行います。次期（2020年3月期）では、ICTソリューションを柱に安心・安全対策を主とする情報通信システム事業を強化・拡大させるとともに、情報通信端末事業におきましても、地域店舗戦略の強化・修理技術の向上を図り、事業規模の維持・拡大を目指します。IoT事業におきましては、これまでに開発した各種サービスを活用し、本格的な事業立上に向けた拡販に取り組んでまいります。また、競争力強化・新規顧客開拓を目的に、各事業領域・分野の融合による新規アイテム・サービスの開発及びソリューションの提供に取り組めます。

事業別では以下の施策を実行してまいります。

#### <情報通信端末事業>

情報通信端末事業におきましては、携帯端末販売はMVNOの台頭、料金プランの分離プランへの移行促進など大きな転換期を迎える中、顧客満足度の向上を目指し、お客様にお選び頂ける店舗創りに取り組めます。また、当年度に新たに出店したauショップ神戸北をはじめとした新規出店店舗の収益力向上、事業拡大に向けた新店舗出店にも積極的に取り組んでまいります。店舗運営システムについては全国のドコモショップ及び異業種への拡販に引き続き取り組めます。携帯端末修理再生では、引き続き生産性の向上により収益力の向上に取り組めます。

#### <情報通信システム事業>

情報通信システム事業におきましては、官公庁向けでは防災・減災対策の充実、インフラ老朽化対策の推進などにより、引き続き需要は堅調に推移すると予測されます。このような中、各種防災行政無線システムや河川監視システムなどを中心に防災・減災需要の取込、保守なドストックビジネスの確保に取り組めます。防災行政無線システムにつきましては、デジタル無線方式を活用した防災行政無線システムをラインナップに加え、今後も、全国の市町村を中心とした新たな市場の取込を図ります。また、民間向けでは、株式会社ディー・エヌ・エーの提供する次世代タクシー配車アプリ「MOV（モブ）」と当社タクシー配車システム「AMCOS S」との2019年中の連携など、当社のIP無線製品、タクシー配車ソリューションの更なる付加価値向上、拡販に取り組めます。

#### <IoT事業>

IoT事業におきましては、「Seiryō Business Platform」を活用し、「ITで仕事をポジティブに、そして生活を豊かに」をサービスコンセプトとして、事業本格化に向け拡販に注力いたします。

#### ② コーポレート・ガバナンス強化に向けた取り組み

当社グループは、企業価値を永続的に高め、全ての利害関係者に貢献するために、経営の効率性を追求し、社会的責任を果たすことが重要であると考えております。その実現のため、今後も内部統制を一層強化するとともに、コーポレート・ガバナンスの充実強化に努めてまいります。

#### ③ 社会・環境への継続的な取り組み

当社グループは、企業活動におけるコンプライアンスの重要性を深く認識し、コンプライアンス行動指針を定めております。この方針の下、社会・環境への継続的な取り組みを推進してまいります。

#### <品質管理・環境問題への取り組み>

当社は、すべての人々に信頼される情報通信サービスの提供を行うために、開発・製造・販売・修理部門で国際規格である品質マネジメントシステムISO9001認証を取得するとともに、全社で環境マネジメントシステムISO14001の各認証を取得し、品質及び環境へ配慮した事業の拡大を推進します。

#### <情報セキュリティの取り組み>

当社は、プライバシーマークの認証を取得し、又、開発部門において国際規格である情報セキュリティマネジメントシステムISO/IEC27001を取得しております。今後も、顧客との信頼関係を第一として、顧客の情報資産及び当社の情報資産を過失、事故、災害、犯罪などのあらゆる脅威から守り、顧客に安全かつ充実したサービスを継続的に提供します。そのために「個人情報の保護に関する法律」をはじめ、国が定める指針及びその他の規範に基づき、情報セキュリティポリシーを定め、この方針の下、継続的に情報管理を徹底してまいります。

#### (5) 経営者の問題認識と今後の方針について

当社グループの経営陣は、現在の事業環境及び入手可能な情報に基づき最善の経営方針を立案するよう努めておりますが、近年の情報通信ビジネス環境の変化から判断して、今後も当該分野に関しては大きな進化を遂げていくものと思われま

す。このような情報通信システムに対するニーズが今後も進化・多様化すると予想される中、常に顧客満足度を維持し向上していくことを重要課題として位置付け、お客様本位の提案活動を行うとともに、ソリューションサービスの向上・技術力強化を目的とした投資を積極的に推進します。

また、それを支えるために、従業員に対する成果主義に基づく人事処遇制度を徹底するとともに、適宜教育や研修等の実施により、必要な技術力を絶えず維持することで、サービス力の向上と生産性の改善を目指してまいります。

## 2 【事業等のリスク】

当社グループの業績及び財務内容等に影響を及ぼす可能性のある主なリスクは、以下のとおりです。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

### (1) 経済状況について

当社グループは、民間向けでは景気の変動などにより、官公庁向けでは予算状況によっては、当社グループの財政状況及び経営成績等に影響を及ぼす可能性があります。

### (2) 市場関連について

情報通信端末事業におきましては、携帯端末販売では、電気通信事業者の販売奨励金制度の見直し、販売代理店による店舗支援策の変更などにより、業績に影響を与える可能性があります。携帯端末修理再生では、修理受付台数の増減、修理単価の増減により、業績に影響を与える可能性があります。パソコン販売では、パソコン販売台数やサービス会員数が急激に減少した場合、業績予測を下回る可能性があります。

情報通信システム事業では、ソフトバンク株式会社向けIP無線事業について市場稼働台数の変動により業績に影響を与える可能性があります。これらの場合は、当社グループの経営成績が影響を受ける可能性があります。

### (3) 市場での競合について

情報通信端末事業では、携帯端末販売店舗及びパソコン販売店舗の出店時に立地環境を調査し、条件の良好な場所に出店しておりますが、近隣への競合店の出店並びにMVNO市場や中古端末市場拡大などの環境変化により予測を下回る可能性があります。また、情報通信システム事業では、同業者との価格競争、通信機器システム分野における携帯端末など、各分野での代替機器との競合により予測を下回る可能性があります。これらの場合は、当社グループの経営成績が影響を受ける可能性があります。

### (4) システム障害について

当社グループが提供するクラウドサービス及びそれに関連する事業は、通信ネットワークに依存しているため、災害や事故等による通信ネットワークの切断、急激なアクセス集中によるサーバーの一時的な作動不能、コンピューターウイルスによる被害、サーバー・ソフトウェアの不具合など、又は人為的な過失による滅失・毀損による接続障害等が生じた場合には、当社のサーバーに接続することが出来ない事態が生じることがあります。これらのサーバー接続障害が当社の責めに帰すべき事由により発生した場合には、当社に対する損害賠償請求や訴訟が生じるなど、当社グループが提供するサービスへの信頼喪失を招き、当社グループの事業及び経営成績並びに企業としての社会的信用に影響を及ぼす可能性があります。

### (5) 製品の品質等について

当社グループは、製品の品質や信頼性の向上に常に努力を払っておりますが、製品の性能、納期上の問題や製品に起因する安全上の問題について契約相手方やその他の第三者から請求を受け、また訴訟等を提起される可能性があります。また、当社グループが最終的に支払うべき賠償額が製造物責任賠償保険等でカバーされるという保証はありません。

(6) 主要仕入先について

当社グループは三菱電機グループ並びに兼松コミュニケーションズ株式会社等の主要仕入先と販売代理店契約等を締結しております。これら主要仕入先との取引は安定的に推移しておりますが、仕入先の経営戦略に変更等が生じた場合や、何らかの理由で商品の調達が困難になった場合、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 有価証券の保有について

当社グループが保有する有価証券は、業務上取引のある金融機関や企業の株式が大半を占めておりますが、投資先の業績や証券市場の動向により、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 退職給付債務について

当社グループの従業員退職給付債務及び費用は、割引率等数理計算で設定される前提条件や年金資産の長期期待運用収益率等に基づいて算定されており、実際の結果が前提条件と異なる場合又は変更された場合、その影響は将来期間の当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 債権管理について

当社グループの取引先の業況には十分注意し、信用状態の継続的な把握をするなど、不良債権の発生防止に努めており、必要に応じて引当の確保に努めております。また、貸倒引当金の計上に関しては、一般債権については貸倒実績率による計算額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し回収不能見込額を計上しておりますが、景気の動向等によっては、貸倒引当金の積み増しを要する事態が生じ、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 情報管理について

当社グループは、事業を行うに当たり取引先や営業に関する情報、又は当社グループや取引先の技術情報等、当社グループの事業に関して多くの秘密情報を保有しております。当社グループは秘密情報の管理の徹底を図っておりますが、予期せぬ事態により情報が流出した場合、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(11) 自然災害、事故災害について

地震、台風等の自然災害や火災等の事故災害が発生し、当社グループの拠点や仕入先の設備等に大きな被害が発生した場合には、当社グループの経営成績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

### 3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

#### ①経営成績の状況

当連結会計年度における国内経済は、企業収益の改善や堅調な雇用環境を背景に引き続き緩やかな回復基調で推移いたしました。海外経済においても、堅調な米国や欧州を中心に底堅く推移しているものの、いまだ海外の不安定な政治動向や地政学的リスクの影響が懸念されており、先行きは不透明な状況にあります。

当社グループの関連する業界では、情報通信端末事業におきましては、スマートフォンやタブレット型多機能端末市場は、携帯端末の出荷台数が減少傾向にあり、MVNO市場や中古端末市場が拡大する中、コンテンツの充実やサービスの多様化が差別化のカギとなっています。情報通信システム事業におきましては、地震、台風、豪雨、豪雪などの自然災害の多発により、国民の安心・安全な暮らしを守る社会インフラの整備・強化が求められています。また、政府が成長戦略に盛り込む第4次産業革命が進んでおり、ビッグデータ、IoT、AI、ブロックチェーンなどの新技術に注目が集まり、大きな発展が期待されています。

このような状況下、当連結会計年度の経営成績は、売上高222億51百万円（前年度比7.4%増）、営業利益3億45百万円（同10.0%増）、経常利益3億53百万円（同3.5%増）、親会社株主に帰属する当期純利益2億42百万円（同22.2%増）となりました。

セグメントの経営成績は、次のとおりであります。なお、前連結会計年度において、「情報通信システム事業」に区分しておりました「IoT事業」について、更なる事業体制の強化、新規事業開発の加速を目的に事業体制を分離いたしました。それに伴い当連結会計年度から、報告セグメントの区分を変更しており、当連結会計年度の比較及び分析は、変更後のセグメント区分に基づいております。

##### 情報通信端末事業

売上高は97億40百万円（前年度比2.1%増）、営業利益は8億47百万円（同7.3%減）となりました。

##### 情報通信システム事業

売上高は125億20百万円（前年度比11.8%増）、営業利益は10億72百万円（同30.4%増）となりました。

##### IoT事業

売上高は4百万円（前年度比306.4%増）、営業損失は2億1百万円（前年同期は営業損失1億67百万円）となりました。

#### ②財政状態の状況

##### （流動資産）

当連結会計年度末における流動資産の残高は、93億57百万円（前連結会計年度末は89億31百万円）となり、4億26百万円増加しました。主な要因は、受取手形及び売掛金の3億18百万円増加によるものです。

##### （固定資産）

当連結会計年度末における固定資産の残高は、21億30百万円（前連結会計年度末は20億63百万円）となり、66百万円増加しました。主な要因は、有形固定資産の30百万円増加によるものです。

##### （流動負債）

当連結会計年度末における流動負債の残高は、61億34百万円（前連結会計年度末は58億4百万円）となり、3億29百万円増加しました。主な要因は、短期借入金3億円の増加によるものです。

##### （固定負債）

当連結会計年度末における固定負債の残高は、2億12百万円（前連結会計年度末は1億88百万円）となり、23百万円増加しました。主な要因は、退職給付に係る負債10百万円の増加によるものです。

##### （純資産）

当連結会計年度末における純資産の残高は、51億41百万円（前連結会計年度末は50億2百万円）となり、1億39百万円増加しました。主な要因は、親会社株主に帰属する当期純利益2億42百万円、剰余金の配当97百万円によるものです。

なお、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を当連結会計年度の期首から適用しており、財政状態については遡及処理後の前連結会計年度末の数値で比較を行っております。



### ③キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、前連結会計年度に比べ2億38百万円増加し、11億3百万円となりました。各キャッシュ・フローの状況は、次のとおりであります。

#### （営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果、得られた資金は4億25百万円（前連結会計年度は2億1百万円の収入）となりました。これは主に、売上債権の増加3億18百万円などにより資金が減少しましたが、税金等調整前当期純利益3億53百万円、減価償却費1億99百万円などにより資金が増加したことによるものです。

#### （投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果、使用した資金は3億3百万円（前連結会計年度は1億99百万円の支出）となりました。これは主に、有形固定資産の取得2億77百万円により資金が減少したことなどによるものです。

#### （財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果、得られた資金は1億15百万円（前連結会計年度は2百万円の収入）となりました。これは主に、配当金の支払98百万円、長期借入金の返済83百万円により資金は減少しましたが、短期借入金の純増額3億円により資金が増加したことなどによるものです。

### ④生産、受注及び販売の実績

「生産、受注及び販売の実績」の金額には、消費税等は含まれておりません。

#### a. 生産実績

当連結会計年度の生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
情報通信端末事業 (百万円)	2,221	95.2
情報通信システム事業 (百万円)	12,514	111.9
I o T事業 (百万円)	4	406.4
合計 (百万円)	14,740	109.0

- (注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。  
2. 上記の生産実績は販売価格によっております。  
3. 情報通信端末事業の生産実績については、携帯情報通信端末の修理再生などであります。

#### b. 商品仕入実績

当連結会計年度の商品仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
情報通信端末事業 (百万円)	5,309	102.8
情報通信システム事業 (百万円)	—	—
I o T事業 (百万円)	—	—
合計 (百万円)	5,309	102.8

- (注) 情報通信端末事業の修理再生部門、情報通信システム事業及びI o T事業については、商品仕入高がないため記載しておりません。

c. 受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)			
	受注高 (百万円)	前年同期比 (%)	受注残高 (百万円)	前年同期比 (%)
情報通信端末事業	2,213	95.3	19	70.8
情報通信システム事業	12,045	101.0	4,556	90.7
I o T事業	5	459.5	0	3,158.4
合計	14,265	100.1	4,576	90.6

(注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。

2. 情報通信端末事業の受注高については、携帯情報通信端末の修理再生などであります。

d. 販売実績

当連結会計年度の販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	前年同期比 (%)
情報通信端末事業 (百万円)	9,732	102.1
情報通信システム事業 (百万円)	12,514	111.9
I o T事業 (百万円)	4	406.4
合計 (百万円)	22,251	107.4

(注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。

2. 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額 (百万円)	割合 (%)	金額 (百万円)	割合 (%)
三菱電機株式会社	3,139	15.1	3,892	17.5
兼松コミュニケーションズ株式会社	4,367	21.1	4,259	19.1

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

①重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたりまして、決算日における資産・負債の報告数値、報告期間における収入・費用の報告数値に影響を与える見積りは、主に工事進行基準、のれん、貸倒引当金、賞与引当金及び法人税等であり、継続して見積り及び判断・評価を行っております。

なお、見積り及び判断・評価については、過去の実績や状況に応じて合理的と考えられる要因に基づいておりますが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は異なる場合があります。

## ②当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当連結会計年度の売上高は、官公庁向け大口受注増、携帯端末販売の販売台数増などにより増収となりました。経常利益は有料道路向け受注案件の急激な損益悪化があったものの、「市町村防災行政無線システム」を中心とした売上規模の増などにより増益となりました。また、「市町村防災行政無線システム」などの新システムや「IoT関連事業」などの新規事業開発など、事業拡大に向けた開発投資、販売促進投資、社内体制強化などの投資を引き続き積極的に推進しております。

セグメントの経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

### a. 情報通信端末事業

情報通信端末事業におきましては、携帯端末販売では前年度からの増店や販売力強化に努め販売台数は増加いたしました。利益面では、スマートフォン関連商材となるアクセサリ品など付加価値商材提案による収益性向上に努めましたが、新店舗出店の負担増分をカバーできず減益となりました。携帯端末修理再生では、引き続き生産性の向上に努めたものの、修理台数の減少により減益となりました。また、携帯電話ショップ向けに自社開発した店舗運営システムは、異業種向けとしても拡販に注力しており、当年度においても自治体向けに納入しております。

これらの結果、情報通信端末事業での売上高は97億40百万円（前年度比2.1%増）、営業利益は8億47百万円（同7.3%減）となりました。

### b. 情報通信システム事業

情報通信システム事業におきましては、前年度より拡販しております「市町村防災行政無線システム」を中心とした官公庁向け大口案件の受注増、IP無線機器販売増などにより増収となりました。利益面では有料道路向け受注案件の急激な損益悪化があったものの、「市町村防災行政無線システム」をはじめとしたソリューションの収益力向上に努めた結果増益となりました。なお、「市町村防災行政無線システム」などへの積極的な開発投資は引き続き推進しております。

また、民間向けソリューションにおきましては株式会社ディー・エヌ・エーの提供する次世代タクシー配車アプリ「MOV（モブ）」と当社タクシー配車システム「AMCOS S」との2019年中の連携を目指し検討を開始するなど当社ソリューションの更なる拡大に向けた取り組みを進めております。

これらの結果、情報通信システム事業の売上高は125億20百万円（前年度比11.8%増）、営業利益は10億72百万円（同30.4%増）となりました。

### c. IoT事業

IoT事業におきましては、「Seiryō Business Platform (SBP)」のIoTサービス展開に向けた各種サービス開発、事業立ち上げに向けた社内体制整備への積極的な投資を行いました。

当年度においては、「Seiryō Business Platform (SBP)」を活用し、都市型農業IoT「農業クラウド」、屋内位置情報ソリューション「オフィスIoT」、業務報告ツール「Check-in」など企業の生産性改善に貢献する製品・サービスパッケージを打ち出すとともに、自治体・企業と連携した実証実験を進めるなど積極的な活動を展開しております。

また、オンライン上で「Seiryō Business Platform (SBP)」に関連する製品・サービスが購入できる「Seiryō Marketplace」をオープンするなど拡販に向けたプラットフォームの整備を進めております。

これらの結果、IoT事業の売上高は4百万円（前年度比306.4%増）、営業損失は2億1百万円（前年同期は営業損失1億67百万円）となりました。

「Seiryō Business Platform (SBP)」では、これまでのICTソリューション企業として培ってきた無線通信、システム開発、クラウドサービスなどの知見を活かし、“モノのインターネット (Internet of Things)”と“現場コミュニケーション (Field-Communication)”を一つのプラットフォームとすることで、現場の改善に必要な“人やモノの見える化”とチーム内の“コミュニケーション強化”を促進し、従来よりも広い業種業態で生産性向上、業務効率化、働き方改革などに資することができます。

今後も同サービスのサービス拡大による事業拡大に向け積極的な活動を行ってまいります。

### ③資本の財源及び資金の流動性についての分析

#### a. キャッシュ・フロー

当連結会計年度のキャッシュ・フローの分析につきましては、「(1) 経営成績等の状況の概要 ③キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

#### b. 資金需要

当社グループの資金需要は主に大きく分けて運転資金需要と設備資金需要の2つがあります。運転資金需要のうち主なものは商品の仕入、システム設計や製品製造等における材料仕入、外注費等の製造/設計等費用、共通するものとして販売費及び一般管理費等の営業費用によるものであります。また、設備資金需要としましては、主に事業運営のための店舗・拠点関連投資やシステム開発・設計などに係る設備投資などであります。

#### c. 財務政策

当社グループは現在、運転資金につきましては、内部資金より充当し、不足が生じた場合は短期借入金で調達を行っております。また、設備資金につきましては、内部資金で不足する場合は、長期借入金により調達を行っております。

### ④目標とする経営指標の達成状況等

当社は中期経営計画において、2021年3月期の経営目標とする経営指標を設定し「マーケット・顧客の拡大」、「新規領域への展開・新規事業の創出」、「事業競争力の強化」、「人材の育成・組織体制の強化」を経営戦略の軸として達成に向けた諸施策を推進しております。当連結会計年度における達成状況は以下のとおりであります。

当社グループは、グループ一丸となって2021年3月期目標に向け、取り組んでまいります。

指標	2020年度（計画）	2018年度（実績）	達成状況
売上高	30,000百万円	22,251百万円	7,748百万円未達
経常利益	1,000百万円	353百万円	646百万円未達
ROE	10%以上	4.8%	5.2ポイント以上未達

#### 4 【経営上の重要な契約等】

契約会社	締結年月	契約の名称	相手先	契約概要（期間、対価（率及び額）等を含む）
当社	1993年9月	取引基本契約	三菱電機株式会社 通信機製作所	継続的な取引に関する基本的事項 （1年毎自動更新）
当社	1994年4月	代理店契約	兼松コミュニケーションズ株式会社	代理店契約（1年毎自動更新）、 手数料規定を含む
当社	1995年9月	取引基本契約	三菱電機株式会社	代理店契約（1年毎自動更新）、 契約額の手数料規定を含む
当社	2004年5月	フランチャイズ 契約	株式会社ピーシー デポコーポレーシ ョン	PC DEPOTブランドによる関西地区での 郊外型パソコン総合店の出店契約 （5年契約、以降2年毎自動更新）
当社	2013年1月	取引基本契約	ソフトバンク株式 会社	継続的な取引に関する基本的事項 （1年毎自動更新）
コムテック サービス 株式会社	2013年11月	代理店契約	KDDI株式会社	代理店契約（1年毎自動更新）、 手数料規定を含む

#### 5 【研究開発活動】

当連結会計年度における当社グループの研究開発の目的、内容、成果及び研究開発費は次のとおりであります。

- ・情報通信端末事業

該当はありません。

- ・情報通信システム事業

安心・安全をキーワードとした、顧客ニーズに合致するシステム・製品・サービスの提供を拡充すべく、各種情報通信システムの開発に注力しております。これらの情報通信システム事業における研究開発費は143百万円であります。

- ・IoT事業

該当はありません。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当連結会計年度は、開発投資、携帯電話ショップの出店及び移転・改装を中心に設備投資を行いました。その結果、当連結会計年度の設備投資額は、241百万円（金額に消費税等は含まない。）となりました。当連結会計年度の設備投資の内訳は、次のとおりであります。

情報通信端末事業	90百万円
情報通信システム事業	115百万円
I o T事業	0百万円
管理部門	34百万円
合計	241百万円

情報通信端末事業では、携帯電話ショップの出店及び移転・改装に係る資産等であります。

情報通信システム事業では、市町村防災行政無線システムに係る資産等であります。

管理部門では、業務システムの構築費用等であります。

また、所要資金は、自己資金によっております。

なお、当連結会計年度において、生産能力に重要な影響を及ぼすような固定資産の売却、除却等はありません。

#### 2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

##### (1) 提出会社

(2019年3月31日現在)

セグメントの 名称	事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額（百万円）					従業員 数 (人)
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積㎡)	工具、器具 及び備品	合計	
情報通信 端末事業	テレコム事業部他 (東京都江東区他)	携帯情報通信 端末修理再生 設備	31	0	—	4	37	33 (19)
	パソコン販売課 (大阪府箕面市)	販売設備	0	—	—	0	0	5 (12)
	情報通信販売事業部 (携帯事業) (大阪府豊中市他)	販売設備	95	—	—	22	118	75 (74)
情報通信 システム事業	情報通信システム事 業部、情報通信ソリ ューション事業部 (兵庫県尼崎市他)	電子機器 測定器設備 映像設備	167	6	—	34	208	167 (36)
管理部門	本店他 (兵庫県伊丹市他)	統括業務施設	164	—	64 (612)	39	268	62 (17)

(注) 1. 上記の金額には、建設仮勘定、消費税等は含まれておりません。

2. 情報通信システム事業部、情報通信ソリューション事業部及び本店（兵庫県伊丹市）以外の建物は、全て賃借しております。

3. 従業員数の（ ）内は、外書きで臨時雇用者数を示しております。

4. パソコン販売課の販売店舗の主要な設備は、賃借しております。

## (2) 国内子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	セグメント の名称	事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額 (百万円)					従業員 数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬 具	土地 (面積㎡)	工具、器具 及び備品	合計	
コムテック サービス 株式会社	情報通信 端末事業	a uららぼーと EXPOCITY他6店舗 (大阪府吹田市 他)	販売設備	36	—	— (—)	21	58	35 (36)
西菱電機エ ンジニアリ ング株式会 社	情報通信 システム 事業	本社 (兵庫県伊丹市)	製造設備	99	10	213 (3,334.1)	31	356	104 (61)

- (注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。  
2. 従業員数の( )内は、外書きで臨時雇用者数を示しております。

## (3) 在外子会社

該当事項はありません。

## 3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備計画については、売上・利益計画に照らして将来継続的に利益に貢献するものに絞って策定しております。連結子会社の設備計画は当社と協議のうえ策定しております。

## (1) 重要な設備の新設

該当事項はありません。

## (2) 重要な改修

該当事項はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### ①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	12,000,000
計	12,000,000

##### ②【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数（株） (2019年3月31日)	提出日現在 発行数（株） (2019年6月27日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	3,500,000	3,500,000	東京証券取引所 市場第二部	単元株式数 100株
計	3,500,000	3,500,000	—	—

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### ①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### ②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### ③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2002年2月14日（注）	298	3,500	97	523	148	498

（注）有償一般募集 298,000株  
（ブックビルディング方式）

発行価格 890円  
引受価額 827円  
発行価額 655円  
資本組入額 328円



## (5) 【所有者別状況】

(2019年3月31日現在)

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	6	13	16	6	—	1,219	1,260	—
所有株式数（単元）	—	2,052	340	9,534	76	—	22,989	34,991	900
所有株式数の割合（%）	—	5.86	0.97	27.25	0.22	—	65.70	100	—

（注） 自己株式1,797株は、「個人その他」に17単元及び「単元未満株式の状況」に97株を含めて記載していません。

## (6) 【大株主の状況】

(2019年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数（株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
三菱電機株式会社	東京都千代田区丸の内2-7-3	812,000	23.21
西岡 伸明	大阪府豊中市	614,000	17.55
西岡 孝	大阪府豊中市	280,000	8.00
西菱電機従業員持株会	兵庫県伊丹市藤ノ木3-5-33	143,500	4.10
株式会社コンセプト	京都市下京区河原町通松原上る2 富永町368	90,000	2.57
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	83,000	2.37
三菱UFJ信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内1-4-5	59,000	1.68
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区丸の内1-1-2	48,000	1.37
吉田 政功	横浜市磯子区	44,700	1.27
海山 智	大阪府池田市	41,100	1.17
計	—	2,215,300	63.33

## (7) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

(2019年3月31日現在)

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,700	—	単元株式数 100株
完全議決権株式 (その他)	普通株式 3,497,400	34,974	単元株式数 100株
単元未満株式	普通株式 900	—	—
発行済株式総数	3,500,000	—	—
総株主の議決権	—	34,974	—

(注) 「単元未満株式」には、当社所有の自己株式97株が含まれております。

## ② 【自己株式等】

(2019年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合 (%)
(自己保有株式) 三菱電機株式会社	兵庫県伊丹市藤ノ木 三丁目5番33号	1,700	—	1,700	0.05
計	—	1,700	—	1,700	0.05

## 2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	2	1,716
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	1,797	—	1,797	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

### 3 【配当政策】

当社は、株主に対する利益配分を経営の最重要政策の一つと考えており、会社の競争力を維持・強化して株主資本の拡充と同利益率の向上を図るとともに、配当水準の向上と安定化に努める方針であります。

当社は定款で、剰余金の配当を中間配当及び期末配当ならびに基準日を定めて配当できる旨を定めており、株主の皆さまへの利益還元のための機会を充実させる目的で中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。これらの剰余金の配当の決定機関は、中間配当については取締役会、期末配当については株主総会です。

当期は、1株当たり33円（うち中間配当10円）を実施することを決定しました。その結果、当事業年度は株主資本配当率2.4%、株主資本当期利益率2.7%となりました。

内部留保資金につきましては、今後予想される経営環境の変化に対処すべく、通信関連新規分野への取り組み強化及び市場ニーズに応える技術力の強化を図るために、有効に投資してまいりたいと考えております。

なお、剰余金の期末配当の基準日は3月31日とし、その他基準日を定めて剰余金の配当をすることができる旨を定款に定めております。また、取締役会の決議によって、9月30日を基準日として中間配当を実施することができる旨を定款に定めております。

当事業年度の剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2018年10月31日 取締役会決議	34	10
2019年6月26日 定時株主総会決議	80	23

#### 4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

##### (1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

###### ① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、企業価値を永続的に高め、全ての利害関係者に貢献するために、経営の効率性を追求し、社会的責任を果たすことが重要であると考えます。このために経営の監督機能と執行機能を分離するとともに、情報開示の迅速化に努めております。これにより経営上の意思決定、執行に係るコーポレート・ガバナンスを有効に機能させ内部統制機能を強化すると同時に、経営の透明性及び健全性の確保を推進しております。さらには、法令・社内規則の遵守及び企業倫理をも含め、従業員等への社内教育制度を充実し、コンプライアンスに対する意識の周知徹底・強化に取り組んでおります。

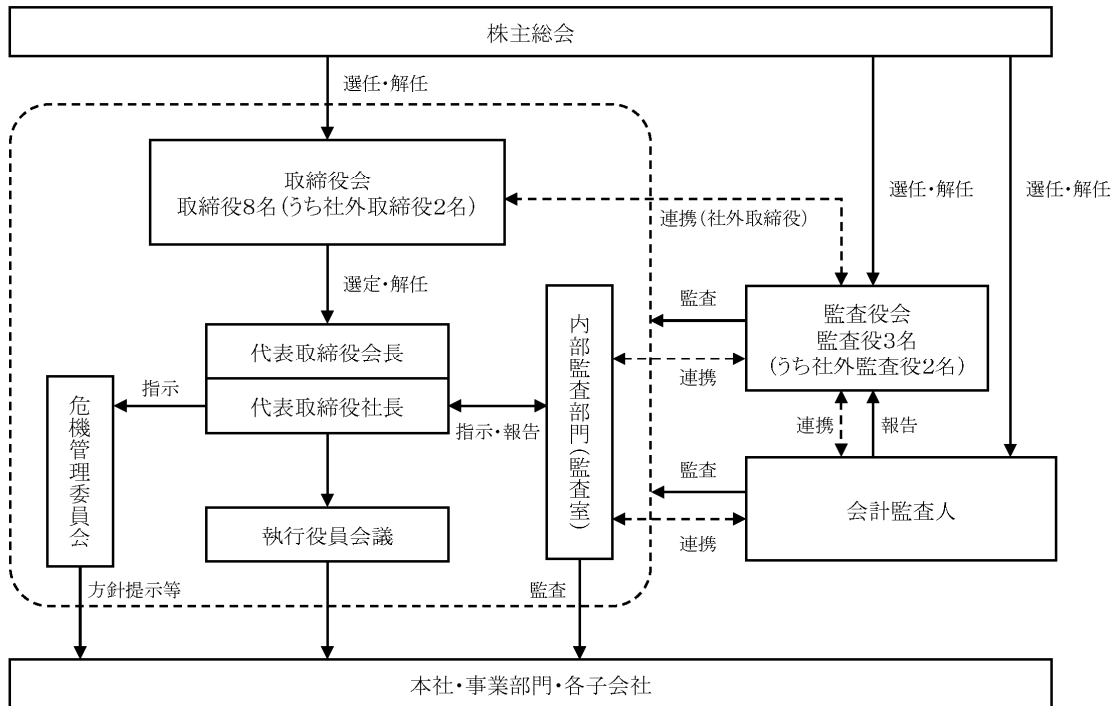
###### ② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

###### <基本説明>

- ・当社は、監査役会設置会社であります。社外監査役を含めた監査役による監査体制が経営監視機能として有効であると判断し、監査役会設置会社形態を採用しております。監査役会は監査役3名で構成し、社外監査役は2名であります。
- ・取締役会は、取締役8名（株式会社東京証券取引所の定める独立役員2名及び監査・知的財産・CSR担当取締役1名を含む）で構成し、監査役3名（株式会社東京証券取引所の定める独立役員1名を含む）出席のもと、毎月1回以上開催しております。取締役会では、経営方針の決定他、業績の進捗状況等が報告されております。
- ・当社は執行役員制を採用しており、業務執行機能と監督機能を分離し、執行役員に業務執行権限を大幅に委譲することにより意思決定の迅速化と責任の明確化を図っております。
- ・取締役は執行役員の業務執行を監視する役割をも担っております。常勤取締役・監査役・執行役員・本部長・事業部長・支社長・室長で構成される執行役員会議を毎月1回開催し、経営環境の変化に迅速に対応すべく、経営戦略の進捗状況・現状分析等を議論・検討しているほか、経営上の重要事項について意見を交換し、一部事項について決定しております。
- ・各設置する機関の構成員は以下のとおりであります。

設置する機関の名称	当該機関の長に該当する者の氏名・役職名	構成員
取締役会	代表取締役社長 西井希伊	西岡伸明、濱津俊男（監査担当）、金井隆、前田真昭、神田達也、小西新太郎（社外取締役）、田内芳信（社外取締役）、竹内徹（常勤監査役）、稗田勝（社外監査役）、國枝雅之（社外監査役）
監査役会	常勤監査役 竹内徹	稗田勝（社外監査役）、國枝雅之（社外監査役）
執行役員会議	代表取締役社長 西井希伊	西岡伸明、濱津俊男（監査担当）、金井隆、前田真昭、神田達也、竹内徹（常勤監査役）、稗田勝（社外監査役）、竹田克佳、川端真史、村山悟志、久部恭範、仲川栄一、中谷健一、中嶋一哉、小野康介、山田晃、卯田真人、田中美裕、福本潤一郎、篠浦洋二、三市高志、鳥居紀彦、草木克利、宮本朗、森功

< 模式図 >



③ 企業統治に関するその他の事項

イ. 内部統制システムの整備の状況

- 当社取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社取締役は、忠実義務が職務執行の根幹をなすものであると認識し、法令及び定款の遵守を基礎として経営方針を策定するとともに、これらを具体的に体系化した社内規則集を作成し、イントラネットで全社に公開いたします。

項目毎の施策は、次の通りです。

- 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

「稟議規則」「情報資産管理規程」「文書管理規程」その他の関連社内規則に基づき、取締役会議事録、稟議書その他の取締役の職務の執行に係る情報の記録は、保存場所・情報セキュリティ・保存方法・保存年数等を定めて担当部門が保存及び管理を行い、取締役及び監査役が容易に閲覧することができるようにいたします。

- 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

「危機管理規則」に基づきコンプライアンス違反、環境、品質、災害、情報セキュリティ等に係る全社横断的なリスクにつき、平時において社長を委員長とする「危機管理委員会」及びその傘下の「安全衛生委員会」「情報セキュリティ委員会」等において現状把握及び対応策の検討・策定を行い、危機防止策を各部門の長の責任において実施いたします。万一これらの事態が発生した場合には、「危機管理規則」「事業継続計画（BCP）」等に基づき社長を本部長とする対策本部の設置、対策チームの設置、適確な広報の実施等により事業を継続し損害を最小限に抑える方策を実施いたします。

- ・取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 

取締役の職務の執行の効率化を図るため、次のような施策を実施いたします。

  - i. 中期経営計画及び年度経営計画を策定し経営目標を具体化することにより、取締役の業務執行の迅速化及び効率化を図ります。
  - ii. 独立した社外取締役を選任し、職務執行に対する監督機能を充実し、経営に対する助言を得ることにより、取締役の職務執行がより効率的に行えるようにいたします。
  - iii. 取締役会において執行役員を選任し、業務執行における決定権限を大幅に委譲して業務を迅速に行うとともに、「職務分掌規則」及び「職務権限規則」により各部門の長の権限を明確化し、重複を防ぎ効率的に業務を遂行いたします。また、毎月開催する「執行役員会議」において経営課題を討議し共有化いたします。
  - iv. 金融商品取引法（第24条の4の4）に規定する財務計算に関する書類その他の情報の適正性を確保するための体制（財務報告に関する内部統制）を構築し運用いたします。
- ・社員の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制（コンプライアンス体制）
 

当社はコンプライアンスを経営方針の重要な柱とし、この方針は経営理念に基づく「経営基本方針」及び「社員行動指針」に明記し、社内研修等により全社に浸透を図っております。

コンプライアンス体制の整備のため、次のような施策を実施いたします。

  - i. 「コンプライアンス行動指針」を制定し、職務執行におけるコンプライアンスについて具体的な指針を示し、社内に周知いたします。
  - ii. 「コンプライアンス基本規則」を中心に「就業規則」「営業規則」等の基本的な社内規則にコンプライアンスに関する規定を整備するとともに、個人情報保護、インサイダー取引等防止、安全衛生管理、内部通報制度、安全保障輸出管理、内外の公務員等に対する贈賄防止その他のコンプライアンスの実効性を担保するための個別の社内規則を制定・運用いたします。
  - iii. コンプライアンスの重要性及び社内規則の内容を周知徹底するための従業員等に対する社内教育を実施いたします。
  - iv. 外部の弁護士及び内部監査部門を通報窓口とする内部通報制度を整備し運用いたします。本制度は、当社グループの社員及び役員、退職者に対しても適用されます。
  - v. 社長直属の内部監査部門による内部監査を継続的に実施し、指摘事項については被監査部門に対して社長名で改善指示を行い、履行状況のフォローアップを行います。
  - vi. 反社会的勢力との関係を遮断し今後も取引その他一切の関係をもたないことを、「コンプライアンス行動指針」に明記し、契約書へ反社会的勢力排除に関する条項を規定するなど徹底した運用を行います。
- ・企業グループとして子会社の業務の適正を確保するための体制
 

当社と4つの子会社（すべて完全子会社）は、経営理念及びこれに基づく「経営基本方針」、「社員行動指針」を共有し、当社は、企業グループとしての業務の適正を確保するために、子会社に対し次のような施策を実施いたします。

  - i. 子会社に対し企業グループの一員としての適正な管理を行うとともに、その経営の自主性を尊重し、子会社との取引においてはその利益を害することがないように留意いたします。
  - ii. 「関係会社管理規則」に基づき、子会社の取締役の業務執行状況について所管部門を通じて当社所管取締役に対し随時報告が行われ、必要に応じて当社取締役会に報告されます。また、毎月開催される当社「執行役員会議」において各所管部門より子会社の業績等が報告されます。
  - iii. 子会社は当社の「安全衛生委員会」及び「情報セキュリティ委員会」に出席し、情報と問題意識を共有いたします。また、子会社の危機管理に関する体制構築を、規則の制定等につき指導いたします。
  - iv. 企業グループとして経営計画を策定し、子会社についても経営目標及び予算を設定することにより、子会社がグループの一員として効率的な業務執行を行うことができるようにいたします。
  - v. 子会社の監査役には、当社監査役または専門的な知見を有する社員が兼務し、当社と一体として監査を行います。また、「関係会社管理規則」に基づき、当社内部監査部門が子会社に対して内部監査を実施いたします。
  - vi. 子会社においてコンプライアンス体制の整備を推進し、必要な社内規則の制定・施行、教育の実施等を指導いたします。

・監査役が実効的に行われることを確保するための体制

当社は監査役会設置会社であり、監査役が監査の実効性を確保するため、次のような施策を実施いたします。なお、監査役を補助するスタッフは現在設置しておりませんが、監査役より設置の申し出があった場合は、その身分の独立性・指示の実効性も含めた対応を検討いたします。

- i. 監査役会が制定する「監査役会規則」、「監査役監査基準」及び「内部統制システムに係る監査の実施基準」を社内規則と位置付け、社内規則集に掲載し全社に周知することにより、監査役が監査を円滑に行えるようにいたします。
- ii. 監査役は、社外取締役と定期的に情報・意見を交換することにより経営課題を共有化いたします。
- iii. 監査役は、当社内部監査部門及び子会社監査役と定期的に情報を交換することにより、当社及び子会社の業務執行の状況について報告を受けるとともに、情報を共有化いたします。
- iv. 監査役は、当社及び子会社の取締役及び従業員から直接必要な報告を受けることができ、また報告した者はそのことを理由として不利益な扱いを受けることはありません。
- v. 監査役職務の執行について生ずる費用または債務の処理については、当該職務の執行に必要でないものを除き、監査役と協議した手続きに従い当社がその費用を負担いたします。
- vi. 監査役は、「執行役員会議」をはじめとする重要な会議に出席することにより、当社及び子会社の具体的な職務執行の状況を直接把握することができる等、必要な追加情報を容易に得ることができ

・反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその整備状況

反社会的勢力排除に向けた体制整備として、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力とは一切関係を遮断し、これらの者に対して毅然とした態度で対応することを基本的な方針としております。

当社の体制は危機管理の一環として対応窓口を明確にし、警察・顧問弁護士等の外部専門機関との連携・協力により、反社会的勢力に対して予防、排除の対応を図っております。

ロ. リスク管理体制の整備の状況

社内における法令遵守の体制として、監査室により各関連法規について内部監査を実施し、教育・指導を行っております。また毎月、執行役員会議を通じ経営実態、財務状態を点検することによりリスクの軽減を図っております。さらには、顧問弁護士と契約し、必要に応じ適宜アドバイスを受ける体制を取っております。

ハ. 責任限定契約の内容の概要

当社は、職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるようにするため、会社法第427条第1項の規定により、取締役（業務執行取締役等であるものを除く）及び監査役との間で同法第423条第1項の賠償責任を限定する契約を締結することができる旨を定款に定めております。当該規定に基づき、当社と社外取締役及び各監査役との間で、同契約を締結しており、その賠償責任の限度額は、法令に定める額としております。

ニ. その他

- ・当社の取締役は3名以上とする旨を定款に定めております。
- ・当社は、自己株式の取得に関して、経営環境の変化に対応し機動的に資本政策を実施するため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。
- ・当社は、株主総会における会社法第309条第2項に定める決議について、株主総会の円滑な運営を図るため議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。
- ・当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらない旨を定款に定めております。
- ・当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。



## (2) 【役員の状況】

## ① 役員一覧

男性 11名 女性 一名 (役員のうち女性の比率-%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長	西岡 伸明	1957年1月12日生	1992年8月 当社総務部長 1993年2月 当社取締役 2002年4月 当社取締役副社長 2007年6月 当社代表取締役副社長 2008年4月 当社代表取締役社長 2019年4月 当社代表取締役会長 (現任)	(注) 3	614,000
代表取締役 社長	西井 希伊	1955年11月13日生	1979年4月 当社入社 2006年4月 当社執行役員東京支社長 2008年6月 当社取締役 2011年4月 当社常務取締役 販売統括・端末販売担当 2018年6月 当社専務取締役 事業全般・子会社管掌 2018年9月 当社代表取締役専務取締役 事業全般・子会社管掌 2019年4月 当社代表取締役社長 事業全般・子会社管掌 2019年6月 当社代表取締役社長 (現任)	(注) 3	13,000
取締役 監査・ 知的財産・ CSR担当	濱津 俊男	1955年9月27日生	1978年4月 旭化成工業株式会社 (現 旭化成株式会社) 入社 1998年10月 当社監査室長 2002年6月 当社執行役員監査室長 2008年6月 当社取締役 コンプライアンス推進担当 2012年4月 当社取締役 監査・法務・輸出管理・知的財産・CSR担当 2019年4月 当社取締役 監査・知的財産・CSR担当 (現任)	(注) 3	10,000
取締役 経営企画・ 財務担当	金井 隆	1957年8月31日生	1981年4月 三菱電機株式会社入社 2007年4月 同社京都製作所経理部長 2013年6月 東芝三菱電機産業システム株式会社取締役 2016年6月 当社取締役 経営企画・財務担当 2016年7月 当社取締役 経営企画・財務担当 常務執行役員経営企画副本部長 2017年4月 当社取締役 経営企画・財務担当 常務執行役員経営企画本部長 (現任)	(注) 3	1,000
取締役 人事総務・法務・ 輸出管理担当	前田 真昭	1960年10月24日生	2008年11月 株式会社アイディーユー取締役 2009年11月 当社入社 人事・総務・広報部長 2011年4月 当社執行役員人事総務部長 2017年4月 当社常務執行役員人事総務部長 2018年6月 当社取締役 人事総務担当 常務執行役員人事総務部長 2019年4月 当社取締役 人事総務・法務・輸出管理担当 常務執行役員人事総務部長 (現任)	(注) 3	2,400

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
取締役 事業全般・子会社担当	神田 達也	1961年6月2日生	1982年3月 当社入社 2011年4月 当社執行役員情報通信端末事業副本部長 2012年4月 当社常務執行役員モバイルソリューション事業本部長 コムテックサービス株式会社代表取締役社長 2014年4月 当社常務執行役員システムソリューション事業本部長 2016年4月 当社常務執行役員事業統括本部長 2019年6月 当社取締役 事業全般・子会社担当常務執行役員事業統括本部長(現任)	(注)3	10,000
取締役	小西 新太郎	1952年5月22日生	1975年4月 小西酒造株式会社入社 1982年5月 同社常務取締役営業本部長 1989年6月 同社代表取締役副社長 1991年6月 同社代表取締役社長(現任) 2015年6月 当社取締役(現任)	(注)3	—
取締役	田内 芳信	1949年9月22日生	1968年4月 日本電信電話公社(現 日本電信電話株式会社)入社 1999年7月 エヌ・ティ・ティ移動通信網株式会社(現 株式会社NTTドコモ)ソリューション事業企画部長 2000年7月 株式会社ドコモ・マシンコミュニケーションズ(現 株式会社NTTドコモに営業譲渡)取締役 2004年6月 株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ関西(現 株式会社NTTドコモ)取締役 2008年7月 ドコモ・エンジニアリング関西株式会社(現 株式会社ドコモCS関西)常務取締役 2018年6月 当社取締役(現任)	(注)3	700

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常勤監査役	竹内 徹	1964年2月22日生	1984年3月 当社入社 2002年4月 当社テレコム第二部長 2006年4月 当社情報通信端末販売事業部長 2010年4月 当社東京テレコム事業所長 2014年4月 当社モバイルソリューション事業本部長 2015年4月 当社監査室長 2017年6月 当社常勤監査役(現任)	(注)4	6,900
監査役	稗田 勝	1950年5月7日生	1973年4月 株式会社神戸銀行(現 株式会社三井住友銀行) 入行 1991年10月 株式会社太陽神戸三井銀行(現 株式会社三井住友銀行) 我孫子支店長 1997年6月 株式会社さくら銀行(現 三井住友銀行) 支店第三部長 1998年11月 同行大手町支店長 2000年9月 同行東京中央法人営業第二部長 2001年6月 神戸電鉄株式会社取締役 2007年4月 同社常務取締役 2012年6月 同社常勤監査役 2017年6月 当社監査役(現任)	(注)4	—
監査役	國枝 雅之	1966年10月11日生	1990年4月 三菱電機株式会社入社 2007年4月 同社半導体・デバイス業務統括部業務部長 2017年4月 同社コミュニケーション・ネットワーク製作所経理部長(現任) 2017年6月 当社監査役(現任)	(注)4	—
計					658,000

- (注) 1. 取締役 小西新太郎及び田内芳信の両氏は、社外取締役であります。
2. 監査役 稗田勝及び國枝雅之の両氏は、社外監査役であります。
3. 取締役の任期は、2018年3月期に係る定時株主総会の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。なお、2019年3月期に係る定時株主総会で選任されました神田達也氏の任期は、当社の定款の定めにより、他の在任取締役の任期の満了する2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
4. 監査役の任期は、2017年3月期に係る定時株主総会の時から2021年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
5. 当社は、法令に定める社外監査役の員数を欠くことになる場合に備え、補欠監査役を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりです。

氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
池内 久夫	1951年7月28日生	1974年4月 株式会社太陽神戸銀行(現 株式会社三井住友銀行) 入行 1995年10月 株式会社さくら銀行(現 株式会社三井住友銀行) 塚口支店長 1997年6月 同行神保町支店長 2000年9月 同行関連事業部室長 2005年6月 S M B C 信用保証株式会社常務取締役 2009年5月 神戸土地建物株式会社常務執行役員 2010年6月 同社専務執行役員 2011年6月 同社専務取締役 2013年6月 当社監査役 2017年6月 当社監査役退任	1年	—
眞田 満	1967年2月28日生	1990年4月 三菱電機株式会社入社 2015年4月 同社冷熱システム製作所総務部長兼コンプライアンスマネージャー 2018年4月 同社コミュニケーション・ネットワーク製作所総務部長兼コンプライアンスマネージャー(現任)	1年	—

## ② 社外役員の状況

- ・当社は社外取締役を2名、社外監査役を2名選任しております。
- ・当社と社外取締役及び各社外監査役との間には特別の利害関係はありません。
- ・社外取締役には、独立した立場から適宜業務執行の適法性及び妥当性について監督頂くことを期待しております。
- ・社外取締役小西新太郎氏は、企業経営者としての豊富な経験と幅広い見識を有しております。その経験と見識を活かし、当社の経営に対する監督機能の強化や経営全般に係る有益な助言を頂けるものと判断しております。また、当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定める独立役員に指定しております。同氏が代表取締役社長として兼職する小西酒造株式会社と当社との間には、資本関係や取引関係もないため、真に独立した立場から監督するという趣旨を十分に満たしていることにより、一般株主との利益相反が生じるおそれが全くないと判断しております。
- ・社外取締役田内芳信氏は、日本電信電話公社（現 日本電信電話株式会社）に入社以来、長年にわたり電気通信事業の営業から技術に至る要職を幅広く歴任されており、豊富な経験と幅広い見識を有しております。その経験と見識を活かし、当社の経営に対する監督機能の強化や経営全般に係る有益な助言を頂けるものと判断しております。また、当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定める独立役員に指定しております。出身企業と当社との間に取引関係はあるものの、当社の取引高全体に対し僅少であること、また資本関係もないため、真に独立した立場から監督するという趣旨を十分に満たしていることにより、一般株主との利益相反が生じるおそれが全くないと判断しております。
- ・社外監査役には、取締役会の意思決定の妥当性・適正性を確保するための助言・提言を行うとともに、取締役の職務執行、重要事項の審議・決定の監視を期待しております。
- ・社外監査役稗田勝氏は、金融機関（現 株式会社三井住友銀行）出身であり、財務・会計に関する識見及び事業会社の常務取締役並びに監査役として携わった幅広い経営経験に基づく識見を当社監査体制の強化に活かして頂けるものと判断しております。また、当社は同氏を株式会社東京証券取引所の定める独立役員に指定しております。当社は株式会社三井住友銀行との取引関係はあるものの、その融資高や他行との取引関係との比較においても、事業等の意思決定に対して影響を与える関係ではないと判断しております。稗田氏本人においても同行を退社して既に長期間（10年以上）が経過しているため、真に独立した立場から監視するという趣旨を十分に満たしていることにより、一般株主との利益相反が生じるおそれが全くないと判断しております。
- ・社外監査役國枝雅之氏は、その他の関係会社である三菱電機株式会社コミュニケーション・ネットワーク製作所の経理部長であり、長年にわたり培ってきた財務及び会計に関する知見を当社監査体制の強化に活かして頂けるものと判断しております。三菱電機株式会社は当社の株式を23.2%保有しており、当社との間には製品の売買、据付、修理、保守点検等の取引がありますが、事業活動や経営判断においては、当社独自の経営方針に従って行っており、上場会社として独立性は確保されているものと認識しております。
- ・社外取締役または社外監査役を、株式会社東京証券取引所の定めに基づく独立役員として指定する場合、その独立性の判断基準は、会社法上の社外要件に加え、同所の定める独立性基準を充足することとしております。

## ③ 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

- ・社外取締役及び社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係につきましては、以下の通りです。

社外取締役には、取締役会において独立した立場から意思決定に関与する役員として、監査役会（株式会社東京証券取引所の定める独立役員1名を含む）との会合を定期的に行い、適宜情報交換・認識の共有を図っております。内部監査状況、会計監査状況及びその結果等については、その会合において報告を受け、必要に応じて説明を求めることなどにより、経営監督機能として連携を図っております。

また、社外監査役は、取締役会に出席し、常勤監査役と連携して経営の監視に必要な情報を共有しているほか、内部監査担当、会計監査人及び内部統制部門と連携をとり、必要に応じて協議・情報交換等を行うことにより、業務の適正性の確保に努めております。

### (3) 【監査の状況】

#### ① 監査役監査の状況

当社における監査役監査については、「監査役監査基準」を制定し、監査役3名（株式会社東京証券取引所のできる独立役員1名を含む）が、この基準に則り取締役の職務執行、重要事項の審議・決定の監視を実施しております。

なお、社外監査役稗田勝氏は金融機関及び事業会社の実務・経営を経験していることから、また、國枝雅之氏は三菱電機株式会社コミュニケーション・ネットワーク製作所の経理部長であることから、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

#### ② 内部監査の状況

当社における内部監査は、内部監査の専門部署として監査室（2名）を設置しており、グループ内の業務全般を監査し、業務の適正性を点検しております。内部監査の実施にあたっては、監査・知的財産・CSR担当取締役、監査役、会計監査人とも連携を図るなど、内部統制の強化にも取り組んでおります。

監査役は内部監査部門より内部監査報告書の提供を受けているほか、子会社の監査役や内部監査部門と定期的に情報交換を行うことにより連携を図っております。会計監査人とは四半期毎に意見交換及び討議を行っており、期中においては適宜情報交換を実施することにより連携を図っております。

#### ③ 会計監査の状況

##### a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

##### b. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員：伊東昌一、中田信之

##### c. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士2名、その他6名

##### d. 監査法人の選定方針と理由

当社は監査法人を、会計監査人としての品質管理の体制、独立性及び継続性・効率性などの観点から総合的に勘案し、選定しております。

当社が会社法に基づく会計監査人及び金融商品取引法における監査人として、有限責任監査法人トーマツを選定した理由としましては、上記選定方針の充足に加え、当社の事業環境及び会計業務に精通していることから選定しております。

なお、当社の会計監査人の解任または不再任の決定方針としましては、監査役会が、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定します。

また、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき、監査役会が会計監査人を解任します。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会におきまして、会計監査人を解任した旨と解任の理由を報告します。

##### e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、監査法人に対して評価を行っております。この評価につきましては、会計監査人が監査の遂行に必要な事項について問題はなかったかを確認することを主旨として、公益財団法人日本監査役協会が公表する「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」に基づき実施しております。この評価の結果、会計監査人の再任に関して指摘すべき事項は認められなかったことを、2019年5月14日開催の監査役会において審議し、承認可決されております。

④ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) i から iii の規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	25	—	25	3
連結子会社	—	—	—	—
計	25	—	25	3

当社における非監査業務の内容は、工事案件受注リスク管理に関するアドバイザー業務であります。

b. その他重要な報酬の内容

（前連結会計年度）

当社及び連結子会社のうち一部の会社については、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属するデロイトトーマツ税理士法人に対して、税務顧問契約等に係る対価を支払っております。

（当連結会計年度）

当社及び連結子会社のうち一部の会社については、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属するデロイトトーマツ税理士法人に対して、税務顧問契約等に係る対価を支払っております。

c. 監査報酬の決定方針

該当事項はありませんが、監査日数等を勘案したうえで決定しております。

d. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査役会は、公益社団法人日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、社内関係部署及び会計監査人から必要な資料を入手し、かつ報告を受け、会計監査人の監査計画、監査の実施状況、及び報酬見積の算出根拠等を確認し、検討した結果、これらについて適切であると判断し、会社法第399条第1項の同意をしております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の取締役報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針は、社外取締役を含む取締役会の決議により、監査役報酬等の額については監査役の協議により決定しております。取締役会における取締役の報酬額の決定に際しては、当該方針の内容を都度出席者に周知するとともに、出席者の意見を尊重し、十分に審議を尽くしたうえで決議しております。

当社の取締役の報酬等は、業績に連動したインセンティブ重視の報酬体系となるよう設計し、適正な評価を行うことにより、業績向上に資することを目的としております。

取締役の報酬体系は、退職慰労金と役員賞与を廃止し、より業績との連動性を高めた月額報酬制度にしております。具体的には、役位に応じた基本報酬に、前期の業績に応じて支給額を算定する業績報酬を加算して固定報酬（月額報酬）を決定する報酬体系にしております。基本報酬は、同業・同規模の他社水準も参考に役位ごとの役割と責任範囲を勘案して決定しており、業績報酬は、業績に対する責任と報酬との関連性を明確にするため、会社業績及び各人の貢献度・経営能力・功労をはじめとする個人業績を総合的に考慮して決定しております。社外取締役（非業務執行取締役）は、監督機能強化の観点から基本報酬のみとしております。取締役の報酬総額は2008年6月25日開催の第42回定時株主総会で決議された年額3億円以内（使用人兼務取締役の使用人分給与含まず。当該決議時点の取締役の員数は8名。）としております。なお、当社の業績報酬は、「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日 内閣府令第3号）に定める利益の状況を示す指標、株式の市場価格の状況を示す指標その他の当社又は当社の関係会社の業績を示す指標を基礎として算定していないことから、業績連動報酬には該当せず、固定報酬の一部としております。

監査役の報酬は、基本報酬のみで構成される固定報酬（月額報酬）としており、各監査役の報酬は常勤・非常勤の別及び業務分担の状況等を勘案して決定しております。なお、監査役の報酬総額は、2006年6月27日開催の第40回定時株主総会で決議された年額6千万円以内（当該決議時点の監査役の員数は3名。）としております。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）	
		固定報酬	対象となる 役員の員数（人）
取締役 (社外取締役を除く)	175	175	7
監査役 (社外監査役を除く)	11	11	1
社外役員	16	16	3

- (注) 1. 取締役の報酬等の総額には、2018年6月26日開催の第52回定時株主総会終結の時をもって退任した取締役2名が含まれております。
2. 取締役の報酬等の総額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。
3. 社外役員の人員数は4名ですが、無支給者が1名いる為支給員数と相違しております。

(5) 【株式の保有状況】

①投資株式の区分の基準及び考え方

純投資目的である投資株式は、もっぱら株式の価値の変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的として保有するものとし、それ以外の理由で保有するものを純投資以外の目的である投資株式としております。

②保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

取引先との関係強化等による企業価値の向上を目的として上場会社の株式を保有する場合があります。取引先との関係強化等によって得られる当社の利益と投資額等のリスクを総合的に勘案して、その投資可否を判断しております。なお、当社では純投資以外の目的として上場株式は保有しておりません。

③保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (百万円)
非上場株式	2	5	2	6
非上場株式以外の株式	2	33	2	41

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額 (百万円)	売却損益の 合計額 (百万円)	評価損益の 合計額 (百万円)
非上場株式	0	—	— (0)
非上場株式以外の株式	1	—	9 (—)

(注) 「評価損益の合計額」の( )は外書きで、当事業年度の減損処理額であります。



## 第5【経理の状況】

### 1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成30年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表に含まれる比較情報のうち、改正府令による改正後の財務諸表等規則第8条の12第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第2条第2項により、改正前の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

### 3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、または会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、意見発信及び普及・コミュニケーションを行う公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、当機構及び企業会計基準委員会等が開催する研修に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	865	1,103
受取手形及び売掛金	※1 6,489	※1 6,807
商品及び製品	656	553
仕掛品	278	377
原材料	265	215
その他	377	300
貸倒引当金	△0	△0
流動資産合計	8,931	9,357
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	1,198	1,235
減価償却累計額	△565	△603
減損損失累計額	△17	△17
建物及び構築物（純額）	615	614
機械装置及び運搬具	387	402
減価償却累計額	△380	△384
減損損失累計額	△1	△1
機械装置及び運搬具（純額）	6	17
工具、器具及び備品	729	786
減価償却累計額	△494	△531
減損損失累計額	△75	△75
工具、器具及び備品（純額）	159	179
土地	278	278
建設仮勘定	0	1
有形固定資産合計	1,061	1,091
無形固定資産		
その他	99	115
無形固定資産合計	99	115
投資その他の資産		
投資有価証券	103	89
繰延税金資産	300	327
その他	536	543
貸倒引当金	△37	△37
投資その他の資産合計	902	923
固定資産合計	2,063	2,130
資産合計	10,995	11,488

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形及び買掛金	※1 3,583	※1 3,560
短期借入金	※2 700	※2 1,000
1年内返済予定の長期借入金	83	—
未払法人税等	156	93
賞与引当金	406	427
短期解約損失引当金	8	2
製品保証引当金	13	43
受注損失引当金	15	4
工事補償引当金	15	41
その他	821	961
流動負債合計	5,804	6,134
固定負債		
退職給付に係る負債	51	62
資産除去債務	77	78
その他	59	72
固定負債合計	188	212
負債合計	5,993	6,346
純資産の部		
株主資本		
資本金	523	523
資本剰余金	498	498
利益剰余金	4,051	4,196
自己株式	△1	△1
株主資本合計	5,072	5,217
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	24	13
退職給付に係る調整累計額	△94	△88
その他の包括利益累計額合計	△69	△75
純資産合計	5,002	5,141
負債純資産合計	10,995	11,488

## ②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	20,722	22,251
売上原価	※1,※2 15,895	※1,※2 17,052
売上総利益	4,827	5,198
販売費及び一般管理費	※3,※4 4,513	※3,※4 4,853
営業利益	313	345
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	2	3
投資有価証券売却益	26	—
保険事務手数料	1	1
受取保険金	5	1
受取補償金	—	19
その他	4	4
営業外収益合計	41	30
営業外費用		
支払利息	3	3
支払手数料	3	3
固定資産除却損	1	8
雇用助成納付金	0	2
納期遅延損害金	—	3
貸倒引当金繰入額	3	—
その他	2	1
営業外費用合計	13	21
経常利益	341	353
特別損失		
特別退職金	9	—
特別損失合計	9	—
税金等調整前当期純利益	331	353
法人税、住民税及び事業税	138	134
法人税等調整額	△5	△24
法人税等合計	133	110
当期純利益	198	242
非支配株主に帰属する当期純利益	—	—
親会社株主に帰属する当期純利益	198	242

## 【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	198	242
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△14	△11
退職給付に係る調整額	42	5
その他の包括利益合計	※1 28	※1 △5
包括利益	226	237
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	226	237
非支配株主に係る包括利益	—	—

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	523	498	3,993	△1	5,013
当期変動額					
剰余金の配当			△139		△139
親会社株主に帰属する 当期純利益			198		198
自己株式の取得					—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	58	—	58
当期末残高	523	498	4,051	△1	5,072

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額合計	
当期首残高	39	△137	△98	4,915
当期変動額				
剰余金の配当				△139
親会社株主に帰属する 当期純利益				198
自己株式の取得				—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△14	42	28	28
当期変動額合計	△14	42	28	86
当期末残高	24	△94	△69	5,002

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				株主資本合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	
当期首残高	523	498	4,051	△1	5,072
当期変動額					
剰余金の配当			△97		△97
親会社株主に帰属する 当期純利益			242		242
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	144	△0	144
当期末残高	523	498	4,196	△1	5,217

	その他の包括利益累計額			純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額合計	
当期首残高	24	△94	△69	5,002
当期変動額				
剰余金の配当				△97
親会社株主に帰属する 当期純利益				242
自己株式の取得				△0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△11	5	△5	△5
当期変動額合計	△11	5	△5	139
当期末残高	13	△88	△75	5,141

## ④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	331	353
減価償却費	138	199
のれん償却額	59	—
賞与引当金の増減額 (△は減少)	157	21
製品保証引当金の増減額 (△は減少)	7	29
受注損失引当金の増減額 (△は減少)	8	△10
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△30	10
特別退職金	9	—
受取利息及び受取配当金	△2	△3
支払利息	3	3
投資有価証券売却損益 (△は益)	△26	—
固定資産除売却損益 (△は益)	1	8
売上債権の増減額 (△は増加)	216	△318
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△344	53
仕入債務の増減額 (△は減少)	△406	△26
その他	117	288
小計	240	609
利息及び配当金の受取額	2	3
利息の支払額	△3	△3
特別退職金の支払額	△9	—
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△29	△183
営業活動によるキャッシュ・フロー	201	425
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有形固定資産の取得による支出	△58	△277
無形固定資産の取得による支出	△48	△42
投資有価証券の取得による支出	△3	△3
投資有価証券の売却による収入	17	16
差入保証金の差入による支出	△113	△25
差入保証金の回収による収入	3	23
その他の収入	4	13
その他の支出	△1	△8
投資活動によるキャッシュ・フロー	△199	△303
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	300	300
長期借入金の返済による支出	△156	△83
ファイナンス・リース債務の返済による支出	△1	△2
自己株式の取得による支出	—	△0
配当金の支払額	△139	△98
財務活動によるキャッシュ・フロー	2	115
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	4	238
現金及び現金同等物の期首残高	861	865
現金及び現金同等物の期末残高	※1 865	※1 1,103



## 【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

### 1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 4社

連結子会社の名称

コムテックサービス株式会社、西菱電機フィールドディング株式会社、  
西菱電機エンジニアリング株式会社、鳥取西菱電機株式会社

### 2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

### 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と一致しております。

### 4. 会計方針に関する事項

#### (1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

##### ① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

##### ② たな卸資産

商品及び製品 総平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

ただし、パーソナルコンピュータ及び関連商品については移動平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）、中古商品については個別法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

仕掛品 個別法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

ただし、携帯端末修理の仕掛品は、総平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

原材料 主として、総平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

#### (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

##### ① 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法（ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法）を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物及び構築物 10～39年

機械装置及び運搬具 6年

工具、器具及び備品 4～6年

##### ② 無形固定資産

自社利用のソフトウェア

社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

その他の無形固定資産

定額法を採用しております。

##### ③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えるため、当連結会計年度に負担すべき支給見込額を計上しております。

③ 短期解約損失引当金

当社グループで加入申込をした携帯電話契約者が短期解約した場合に、当社グループと代理店委託契約を締結している電気通信事業者に対して返金すべき手数料の支払いに備えるため、短期解約実績率に基づき短期解約に係る手数料の返金見込額を計上しております。

④ 製品保証引当金

製品の無償補修に係る支出に備えるため、発生額を個別に見積もることができる費用については当該費用を、その他については過去の無償補修実績を基礎として無償補修見込額を計上しております。

⑤ 受注損失引当金

受注案件に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末において将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積可能なものについては、当連結会計年度末における損失見積額を計上しております。

⑥ 工事補償引当金

工事請負契約書等に基づく、工事の瑕疵担保期間内に発生する補償費用に備えるため、過去2年間の実績を基礎に将来の補償見込額を加味して計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定率法により、発生年度の翌連結会計年度から処理することとしております。

③小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

当社は、借入金について将来の金利の変動によるリスクをヘッジするために金利スワップを行うこととしております。金利スワップについては特例処理を採用することとしております。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヵ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっております。



(連結貸借対照表関係)

※1. 連結会計年度末日満期手形

連結会計年度末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当連結会計年度の末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形	1百万円	13百万円
支払手形	56	99

※2. 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行2行と当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。これらの契約に基づく連結会計年度末における当座貸越契約及び貸出コミットメントに係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額及び貸出コミットメントの総額	2,500百万円	2,500百万円
借入実行残高	700	1,000
差引額	1,800	1,500

(連結損益計算書関係)

※1. 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後（前連結会計年度末に計上した簿価切下額の戻入額相殺後）の金額であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	1百万円	9百万円

※2. 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額（△は戻入額）

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	8百万円	△10百万円

※3. 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給与及び賞与	1,936百万円	2,058百万円
賞与引当金繰入額	193百万円	196百万円
退職給付費用	84百万円	79百万円
製品保証引当金繰入額	7百万円	29百万円
工事補償引当金繰入額	△0百万円	25百万円

※4. 一般管理費に含まれる研究開発費は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	114百万円	143百万円

(連結包括利益計算書関係)

※1. その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	6百万円	△16百万円
組替調整額	△26百万円	－百万円
税効果調整前	△20百万円	△16百万円
税効果額	6百万円	5百万円
その他有価証券評価差額金	△14百万円	△11百万円
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	20百万円	△19百万円
組替調整額	40百万円	28百万円
税効果調整前	61百万円	8百万円
税効果額	△18百万円	△2百万円
退職給付に係る調整額	42百万円	5百万円
その他の包括利益合計	28百万円	△5百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	3,500,000	－	－	3,500,000
合計	3,500,000	－	－	3,500,000
自己株式				
普通株式	1,795	－	－	1,795
合計	1,795	－	－	1,795

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年6月27日 定時株主総会	普通株式	104	30	2017年3月31日	2017年6月28日
2017年10月31日 取締役会	普通株式	34	10	2017年9月30日	2017年12月8日

(注) 2017年6月27日開催の定時株主総会決議に基づく配当金支払額について、1株当たり配当額には、記念配当10円が含まれております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月26日 定時株主総会	普通株式	62	利益剰余金	18	2018年3月31日	2018年6月27日

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	3,500,000	—	—	3,500,000
合計	3,500,000	—	—	3,500,000
自己株式				
普通株式（注）	1,795	2	—	1,797
合計	1,795	2	—	1,797

（注） 普通株式の自己株式の株式数の増加2株は単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり配当額 （円）	基準日	効力発生日
2018年6月26日 定時株主総会	普通株式	62	18	2018年3月31日	2018年6月27日
2018年10月31日 取締役会	普通株式	34	10	2018年9月30日	2018年12月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

（決議）	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
2019年6月26日 定時株主総会	普通株式	80	利益剰余金	23	2019年3月31日	2019年6月27日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）	当連結会計年度 （自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
現金及び預金勘定	865百万円	1,103百万円
現金及び現金同等物	865百万円	1,103百万円

（リース取引関係）

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行借入による方針であります。

デリバティブは、借入金の金利変動リスクを回避するために利用し、投機的な取引は行っていません。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社グループの営業規則に従い、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を1年ごとに点検し、必要に応じて与信限度額を見直す体制としております。

投資有価証券である株式は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である買掛金は、そのほとんどが1年以内の支払期日であります。

借入金のうち、短期借入金は主に営業取引にかかる資金調達としており、長期借入金は主に設備投資に係る資金調達としております。

デリバティブ取引の執行・管理については、取締役会に諮り、承認を得て行っております。また、デリバティブの利用にあたっては、信用リスクを軽減するために、格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

また、営業債務は、流動性リスクに晒されておりますが、当社グループでは、各社が月次に資金繰実績・見込を作成するなどの方法により管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません。(注2)参照)

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	865	865	—
(2) 受取手形及び売掛金	6,489	6,489	—
(3) 投資有価証券	97	97	—
資産計	7,453	7,453	—
(1) 支払手形及び買掛金	3,583	3,583	—
(2) 短期借入金	700	700	—
(3) 長期借入金	83	83	0
負債計	4,367	4,367	0

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金及び預金	1,103	1,103	—
(2) 受取手形及び売掛金	6,807	6,807	—
(3) 投資有価証券	84	84	—
資産計	7,996	7,996	—
(1) 支払手形及び買掛金	3,560	3,560	—
(2) 短期借入金	1,000	1,000	—
負債計	4,560	4,560	—

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、並びに(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。

なお、投資有価証券はその他有価証券として保有しており、これに関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負債

(1) 支払手形及び買掛金、並びに(2) 短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

(3) 長期借入金

元金の合計額を、同様の新規借入れを行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定してあります。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式	6	5

上記については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3) 投資有価証券」には含めておりません。

(注3) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	865
受取手形及び売掛金	6,489
合計	7,355

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	1,103
受取手形及び売掛金	6,807
合計	7,911

(注4) 短期借入金および長期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)
短期借入金	700	—	—	—	—
長期借入金	83	—	—	—	—

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)
短期借入金	1,000	—	—	—	—



(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	97	60	36
	小計	97	60	36
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		97	60	36

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額6百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	84	64	19
	小計	84	64	19
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		84	64	19

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額5百万円)については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	33	26	—
合計	33	26	—

当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社グループは確定給付企業年金法に基づく規約型確定給付企業年金（キャッシュバランス・プラン）制度を導入しているとともに、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を設けています。

なお、一部の連結子会社においては、退職一時金制度を導入しております。

2. 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	1,480百万円	1,512百万円
勤務費用	106	106
利息費用	1	1
数理計算上の差異の発生額	△12	5
退職給付の支払額	△64	△25
その他	0	0
退職給付債務の期末残高	1,512	1,600

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	1,409百万円	1,469百万円
期待運用収益	28	29
数理計算上の差異の発生額	8	△14
事業主からの拠出額	88	89
退職給付の支払額	△64	△25
年金資産の期末残高	1,469	1,549

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	1,512百万円	1,600百万円
年金資産	△1,469	△1,549
	42	51
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	42	51
退職給付に係る負債	42	51
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	42	51

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	106百万円	106百万円
利息費用	1	1
期待運用収益	△28	△29
数理計算上の差異の費用処理額	40	28
確定給付制度に係る退職給付費用	120	106

(注) 上記退職給付費用以外に、前連結会計年度では特別退職金9百万円を特別損失に計上しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
数理計算上の差異	△61百万円	△8百万円
合計	△61	△8

## (6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識数理計算上の差異	136百万円	128百万円
合計	136	128

## (7) 年金資産に関する事項

## ① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
債券	26%	27%
株式	18	18
現金及び預金	37	37
オルタナティブ投資	16	16
その他	2	2
合計	100	100

(注) オルタナティブ投資は、主にファンドへの投資です。

## ② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

## (8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
割引率	0.1%	0.1%
長期期待運用収益率	2.0%	2.0%

## 3. 簡便法を適用した確定給付制度

## (1) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	10百万円	8百万円
退職給付費用	0	2
退職給付の支払額	△2	—
退職給付に係る負債の期末残高	8	10

## (2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	8百万円	10百万円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	8	10
退職給付に係る負債	8	10
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	8	10

## (3) 退職給付費用

簡便法で計算した退職給付費用 前連結会計年度0百万円 当連結会計年度2百万円

## 4. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度52百万円、当連結会計年度53百万円でありま

す。

5. その他の退職給付に関する事項

退職一時金制度から確定拠出年金制度への移行に伴う確定拠出年金制度への資産移管額108百万円を4年間で支払うこととしており、前連結会計年度末時点での未移管額21百万円を未払金に計上していましたが、当連結会計年度末時点で移管が完了しております。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	(百万円)	(百万円)
繰延税金資産		
賞与引当金	127	135
未払費用	19	21
未払事業税	18	14
資産除去債務	23	24
貸倒引当金	11	11
長期未払金	16	16
減価償却超過額	20	31
減損損失	17	16
税務上の繰越欠損金 (注)	21	13
退職給付に係る負債	15	19
その他	72	81
小計	366	385
評価性引当額	△36	△35
計	329	350
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△12	△6
資産除去債務に対応する除去費用	△17	△16
その他	—	△0
計	△29	△22
繰延税金資産の純額	300	327

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金 (※1)	—	4	3	—	—	5	13
評価性引当額	—	—	—	—	—	—	—
繰延税金資産	—	4	3	—	—	5	(※2) 13

(※1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(※2) 税務上の繰越欠損金13百万円 (法定実効税率を乗じた額) について、繰延税金資産13百万円を計上しております。当該繰延税金資産を計上した連結子会社の税務上の繰越欠損金は、将来の課税所得の見込みにより、回収可能と判断し、評価性引当額を認識しておりません。

(表示方法の変更)

前連結会計年度において、繰延税金資産の「その他」に含めていた「減価償却超過額」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より、独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の注記の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度において、繰延税金資産の「その他」に表示していた93百万円は、「減価償却超過額」20百万円、「その他」72百万円として組み替えております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
	(%)	
法定実効税率	30.8	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.0	
住民税均等割	5.0	
試験研究費特別控除	△3.6	
税率変更による期末繰延税金資産の減額	0.4	
賃上げ・投資促進税制に係る税額控除	—	
未実現利益税効果未認識額	△0.2	
評価性引当額の増減	4.2	
その他	1.6	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	40.2	

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

(1) 報告セグメントの決定方法

当社グループの報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、情報通信端末事業、情報通信システム事業、IoT事業別に取扱製品・サービスについて包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

従って、当社グループは、事業本部を基礎とした製品・サービス別のセグメントから構成されており、「情報通信端末事業」、「情報通信システム事業」、「IoT事業」の3つを報告セグメントとしております。

「情報通信端末事業」は、携帯情報通信端末・パーソナルコンピュータ及びその関連商品の販売及び修理・再生を行っております。

「情報通信システム事業」は、情報通信機器システム・無線通信機器・情報映像機器システム等の製作・販売及び技術サービス、映像システムの運用による放映・放送番組の制作などを行っております。

「IoT事業」は、IoTサービス展開に向けた各種サービス開発などを行っております。

(2) 報告セグメントの変更等に関する事項

当社グループは、中期経営計画で掲げる経営戦略のもと、各種システム開発、販売促進、新規市場・新規事業開拓などの投資を行ってまいりましたが、当連結会計年度よりIoTを活用したソリューションなど新規事業分野への進出に向け体制強化を図り、新規事業開発を加速させるとともに、意思決定の迅速化や責任の明確化を図り、より適切な意思決定を行うことを目的に、当該業務を行う部署を事業開発本部とする組織変更を行いました。これに伴い、当連結会計年度より、報告セグメントを従来の「情報通信端末事業」及び「情報通信システム事業」の2区分から、「情報通信端末事業」、「情報通信システム事業」及び「IoT事業」の3区分に変更しております。

なお、前連結会計年度のセグメント情報は、変更後の報告セグメントの区分に基づき作成したものを開示しております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部利益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額	合計
	情報通信 端末事業	情報通信 システム事業	I o T事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	9,534	11,186	1	20,722	—	20,722
セグメント間の内部売上高 又は振替高	6	8	—	15	△15	—
計	9,540	11,195	1	20,737	△15	20,722
セグメント利益又は損失(△)	914	822	△167	1,569	△1,256	313
セグメント資産	2,203	6,778	6	8,987	2,008	10,995
その他の項目						
減価償却費	37	76	1	115	22	138
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	37	77	1	116	126	242

(注) 1. セグメント利益又は損失の調整額△12億56百万円は、主に各報告セグメントに配分していない提出会社の管理部門に係る全社費用であります。

2. セグメント資産の調整額20億8百万円は、各報告セグメントに配分していない全社資産20億8百万円が含まれております。全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない親会社における余資運用資金、長期投資資金及び管理部門に係る資産等であります。

3. 減価償却費の調整額は、本社の有形固定資産に係る減価償却費等であります。

4. 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額は、本社の有形固定資産等の設備投資額であります。

5. 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額には長期前払費用と同費用に係る償却額が含まれております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額	合計
	情報通信 端末事業	情報通信 システム事業	I o T 事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	9,732	12,514	4	22,251	—	22,251
セグメント間の内部売上高 又は振替高	8	6	—	15	△15	—
計	9,740	12,520	4	22,266	△15	22,251
セグメント利益又は損失(△)	847	1,072	△201	1,718	△1,373	345
セグメント資産	2,138	7,221	3	9,363	2,124	11,488
その他の項目						
減価償却費	63	90	3	157	41	199
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	90	115	0	207	34	241

- (注) 1. セグメント利益又は損失の調整額△13億73百万円は、主に各報告セグメントに配分していない提出会社の管理部門に係る全社費用であります。
2. セグメント資産の調整額21億24百万円は、各報告セグメントに配分していない全社資産21億24百万円が含まれております。全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない親会社における余資運用資金、長期投資資金及び管理部門に係る資産等であります。
3. 減価償却費の調整額は、本社の有形固定資産に係る減価償却費等であります。
4. 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額は、本社の有形固定資産等の設備投資額であります。
5. 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額には長期前払費用と同費用に係る償却額が含まれております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱電機株式会社	3,139	情報通信システム事業
兼松コミュニケーションズ株式会社	4,367	情報通信端末事業

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱電機株式会社	3,892	情報通信システム事業
兼松コミュニケーションズ株式会社	4,259	情報通信端末事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。



【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額	合計
	情報通信 端末事業	情報通信 システム事業	I o T事業	計		
当期償却額	—	59	—	59	—	59
当期末残高	—	—	—	—	—	—

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(1) 親会社及び法人主要株主等

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
その他の 関係会社	三菱電機㈱	東京都 千代田区	175,820	電気機器の 製造及び販 売	(被所有) 直接 23.2	同社製品の 販売・保守	各種製品の 販売、据 付・修理・ 保守点検、 業務の受託	3,139	売掛金	642
						同社製品他 の購入	各種製品の 購入、据 付・修理、 業務の委託	1,695	買掛金 未払金 未収入金	1,211 13 169

(注) 1. 取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。

2. 価格その他の取引条件は、市場の実勢を参考に折衝の上決定しております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(1) 親会社及び法人主要株主等

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
その他の 関係会社	三菱電機㈱	東京都 千代田区	175,820	電気機器の 製造及び販 売	(被所有) 直接 23.2	同社製品の 販売・保守	各種製品の 販売、据 付・修理・ 保守点検、 業務の受託	3,892	売掛金	717
						同社製品他 の購入	各種製品の 購入、据 付・修理、 業務の委託	2,078	買掛金 未払金 未収入金	1,205 27 29

(注) 1. 取引金額には消費税等が含まれておらず、期末残高には消費税等が含まれております。

2. 価格その他の取引条件は、市場の実勢を参考に折衝の上決定しております。

## (1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	1,430.01円	1,469.80円
1株当たり当期純利益	56.75円	69.37円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	198	242
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	198	242
普通株式の期中平均株式数(株)	3,498,205	3,498,204

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	5,002	5,141
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	—	—
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	5,002	5,141
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通 株式の数(株)	3,498,205	3,498,203

## (重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】（2019年3月31日現在）

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	700	1,000	0.8	—
1年以内に返済予定の長期借入金	83	—	0.8	—
1年以内に返済予定のリース債務	1	3	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）	—	—	—	—
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く）	6	10	—	—
その他有利子負債	—	—	—	—
計	791	1,013	—	—

(注) 1. リース債務の平均利率については、一部のリース債務について、リース料総額に含まれる利息相当分を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

2. リース債務（1年以内に返済予定のものを除く）の連結決算日後5年以内における返済予定額は以下のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
リース債務	3	3	2	0

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	3,761	8,531	13,601	22,251
税金等調整前四半期純損失(△) 又は当期純利益 (百万円)	△335	△225	△239	353
親会社株主に帰属する四半期純損失 (△) 又は親会社株主に帰属する当 期純利益 (百万円)	△235	△164	△183	242
1株当たり四半期純損失(△) 又は当期純利益 (円)	△67.25	△46.97	△52.41	69.37

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は 1株当たり四半期純損失(△) (円)	△67.25	20.28	△5.44	121.78

## 2 【財務諸表等】

### (1) 【財務諸表】

#### ① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	596	698
受取手形	※1 71	※1 594
売掛金	※2 5,796	※2 5,358
商品及び製品	484	342
仕掛品	113	85
原材料	226	161
前払費用	42	48
未収入金	※2 296	※2 124
関係会社短期貸付金	496	700
その他	※2 53	※2 138
貸倒引当金	△0	△0
流動資産合計	8,176	8,251
固定資産		
有形固定資産		
建物	470	466
構築物	13	11
機械及び装置	2	1
車両運搬具	—	5
工具、器具及び備品	130	130
土地	64	64
建設仮勘定	0	1
有形固定資産合計	681	681
無形固定資産		
特許権	1	0
ソフトウェア	80	79
ソフトウェア仮勘定	5	24
無形固定資産合計	86	103
投資その他の資産		
投資有価証券	47	39
関係会社株式	195	195
出資金	1	1
関係会社長期貸付金	124	—
前払年金費用	93	76
繰延税金資産	185	185
差入保証金	410	415
その他	31	28
貸倒引当金	△37	△37
投資その他の資産合計	1,049	903
固定資産合計	1,818	1,688
資産合計	9,995	9,939

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	※2 3,129	※2 2,890
短期借入金	※3 700	※3 1,000
1年内返済予定の長期借入金	83	—
リース債務	—	1
未払金	※2 477	※2 328
未払費用	157	151
未払法人税等	122	23
未払消費税等	—	151
前受金	12	27
預り金	46	90
賞与引当金	329	293
短期解約損失引当金	8	2
製品保証引当金	13	13
受注損失引当金	15	4
工事補償引当金	15	41
その他	0	0
流動負債合計	5,113	5,020
固定負債		
長期末払金	53	53
リース債務	—	4
資産除去債務	72	73
その他	—	8
固定負債合計	126	139
負債合計	5,239	5,159
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	523	523
資本剰余金		
資本準備金	498	498
資本剰余金合計	498	498
利益剰余金		
利益準備金	106	106
その他利益剰余金		
別途積立金	3,450	3,450
繰越利益剰余金	167	196
利益剰余金合計	3,723	3,752
自己株式	△1	△1
株主資本合計	4,743	4,773
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	12	6
評価・換算差額等合計	12	6
純資産合計	4,755	4,780
負債純資産合計	9,995	9,939

## ②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	※1 16,762	※1 17,027
売上原価	※1 12,903	※1 13,000
売上総利益	3,858	4,027
販売費及び一般管理費	※1, ※2 3,707	※1, ※2 3,875
営業利益	150	151
営業外収益		
受取利息及び配当金	※1 52	※1 36
関係会社株式売却益	26	—
保険事務手数料	1	1
その他	7	3
営業外収益合計	88	41
営業外費用		
支払利息	3	3
支払手数料	3	3
固定資産除却損	0	6
雇用助成納付金	0	2
納期遅延損害金	—	3
貸倒引当金繰入額	3	—
その他	1	0
営業外費用合計	11	18
経常利益	227	173
税引前当期純利益	227	173
法人税、住民税及び事業税	92	44
法人税等調整額	△13	2
法人税等合計	79	46
当期純利益	148	127

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金		利益剰余金合計
		資本準備金	資本剰余金合計		別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	523	498	498	106	3,550	58	3,714
当期変動額							
別途積立金の取崩					△100	100	－
剰余金の配当						△139	△139
当期純利益						148	148
自己株式の取得							－
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）							
当期変動額合計	－	－	－	－	△100	108	8
当期末残高	523	498	498	106	3,450	167	3,723

	株主資本		評価・換算 差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差 額等合計	
当期首残高	△1	4,735	28	28	4,763
当期変動額					
別途積立金の取崩		－			－
剰余金の配当		△139			△139
当期純利益		148			148
自己株式の取得		－			－
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			△16	△16	△16
当期変動額合計	－	8	△16	△16	△7
当期末残高	△1	4,743	12	12	4,755

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本						
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			利益剰余金合計
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		
				別途積立金	繰越利益剰余金		
当期首残高	523	498	498	106	3,450	167	3,723
当期変動額							
別途積立金の取崩							—
剰余金の配当						△97	△97
当期純利益						127	127
自己株式の取得							—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）							
当期変動額合計	—	—	—	—	—	29	29
当期末残高	523	498	498	106	3,450	196	3,752

	株主資本		評価・換算 差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差 額等合計	
当期首残高	△1	4,743	12	12	4,755
当期変動額					
別途積立金の取崩		—			—
剰余金の配当		△97			△97
当期純利益		127			127
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			△5	△5	△5
当期変動額合計	△0	29	△5	△5	24
当期末残高	△1	4,773	6	6	4,780



## 【注記事項】

(重要な会計方針)

### 1. 有価証券の評価基準及び評価方法

#### (1) 子会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

#### (2) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

### 2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

#### (1) 商品及び製品 総平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

ただし、パーソナルコンピュータ及び関連商品については移動平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）、中古商品については個別法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

#### (2) 仕掛品 個別法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

ただし、携帯端末修理の仕掛品は、総平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

#### (3) 原材料 総平均法による原価法（貸借対照表価額については、収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しております。

### 3. 固定資産の減価償却の方法

#### (1) 有形固定資産

定率法（ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法）を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 15～39年

構築物 10年

機械及び装置 6年

工具、器具及び備品 4～6年

#### (2) 無形固定資産

自社利用のソフトウェア

社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用しております。

その他の無形固定資産

定額法を採用しております。

### 4. 引当金の計上基準

#### (1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

#### (2) 賞与引当金

従業員の賞与の支払に備えるため、当期に負担すべき支給見込額を計上しております。

#### (3) 短期解約損失引当金

当社で加入申込をした携帯電話契約者が短期解約した場合に、当社と代理店委託契約を締結している電気通信事業者に対して返金すべき手数料の支払いに備えるため、短期解約実績率に基づき短期解約に係る手数料の返金見込額を計上しております。

(4) 製品保証引当金

製品の無償補修に係る支出に備えるため、発生額を個別に見積もることができる費用については当該費用を、その他については過去の無償補修実績を基礎として無償補修見込額を計上しております。

(5) 受注損失引当金

受注案件に係る将来の損失に備えるため、当期末において将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積可能なものについては、当期末における損失見積額を計上しております。

(6) 工事補償引当金

工事請負契約書等に基づく、工事の瑕疵担保期間内に発生する補償費用に備えるため、過去2年間の実績を基礎に将来の補償見込額を加味して計上しております。

(7) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当期末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当期までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定率法により、発生年度の翌期から処理することとしております。

未認識数理計算上の差異の貸借対照表における取扱いが連結貸借対照表と異なります。

5. 収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用しております。

6. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

貸借対照表

（「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更）

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。）を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」166百万円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」185百万円に含めて表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)（評価性引当額の合計額を除く。）に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

損益計算書

前事業年度において、営業外費用の「その他」に含めていた「固定資産除却損」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より、独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、営業外費用の「その他」に表示していた2百万円は、「固定資産除却損」0百万円、「その他」1百万円として組み替えております。

(貸借対照表関係)

※1. 期末日満期手形

期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が期末残高に含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
受取手形	1百万円	13百万円

※2. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務 (区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	659百万円	427百万円
短期金銭債務	1,371百万円	1,384百万円

※3. 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行2行と当座貸越契約及び貸出コミットメント契約を締結しております。これらの契約に基づく事業年度末における当座貸越契約及び貸出コミットメントに係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額及び貸出コミットメントの総額	2,500百万円	2,500百万円
借入実行残高	700	1,000
差引額	1,800	1,500

(損益計算書関係)

※1. 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	1,709百万円	1,570百万円
材料費及び外注費	2,373百万円	2,859百万円
受取出向料	308百万円	488百万円
業務委託費	11百万円	9百万円
その他	57百万円	76百万円
営業取引以外の取引による取引高		
受取配当金	45百万円	27百万円
その他	5百万円	6百万円

※2. 販売費及び一般管理費の主なもののうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給与及び賞与	1,552百万円	1,597百万円
賞与引当金繰入額	169百万円	154百万円
退職給付費用	79百万円	73百万円
減価償却費	57百万円	84百万円
製品保証引当金繰入額	7百万円	△0百万円
工事補償引当金繰入額	△0百万円	25百万円
おおよその割合		
販売費	69.7%	69.2%
一般管理費	30.3%	30.8%

(有価証券関係)

前事業年度 (2018年3月31日)

子会社株式 (貸借対照表計上額 子会社株式1億95百万円) は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度 (2019年3月31日)

子会社株式 (貸借対照表計上額 子会社株式1億95百万円) は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	(百万円)	(百万円)
繰延税金資産		
賞与引当金	100	89
未払費用	15	13
未払事業税	15	7
資産除去債務	22	22
貸倒引当金	11	11
長期未払金	16	16
減価償却超過額	20	31
減損損失	17	16
その他	51	54
小計	272	262
評価性引当額	△36	△35
計	236	227
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△5	△3
前払年金費用	△28	△23
資産除去債務に対応する除去費用	△17	△15
計	△50	△42
繰延税金資産の純額	185	185

(表示方法の変更)

前事業年度において、繰延税金資産の「その他」に含めていた「減価償却超過額」は、金額の重要性が増したため、当事業年度より、独立掲記することとしております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の注記の組替えを行っております。

この結果、前事業年度において、繰延税金資産の「その他」に表示していた72百万円は、「減価償却超過額」20百万円、「その他」51百万円として組み替えております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
	(%)	(%)
法定実効税率	30.8	30.6
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	2.6	3.6
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△6.1	△5.0
住民税均等割	6.5	7.6
試験研究費特別控除	△5.2	△5.1
税率変更による期末繰延税金資産の減額	0.6	—
賃上げ・投資促進税制に係る税額控除	—	△4.1
評価性引当額の増減	6.1	△0.3
その他	△0.6	△0.6
税効果会計適用後の法人税等の負担率	34.7	26.7

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区 分	資産の 種 類	当期首 残 高	当 期 増 加 額	当 期 減 少 額	当 期 償 却 額	当期末 残 高	減価償却 累計額
有形 固定資産	建物	470	34	0	38	466	498
	構築物	13	0	0	2	11	34
	機械及び装置	2	—	—	1	1	374
	車両運搬具	—	5	—	0	5	0
	工具、器具及び備品	130	62	0	61	130	481
	土地	64	—	—	—	64	—
	建設仮勘定	0	1	0	—	1	—
	計	681	104	2	102	681	1,388
無形 固定資産	特許権	1	—	—	0	0	0
	ソフトウェア	80	30	2	30	79	301
	ソフトウェア仮勘定	5	24	5	—	24	—
	計	86	54	7	30	103	302

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科 目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	37	0	0	37
賞与引当金	329	293	329	293
短期解約損失引当金	8	2	8	2
製品保証引当金	13	13	13	13
受注損失引当金	15	4	15	4
工事補償引当金	15	41	15	41
前払年金費用 (△は資産)	△93	106	89	△76

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 大阪府中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載します。 公告掲載URL <a href="http://www.seiryodenki.co.jp/">http://www.seiryodenki.co.jp/</a>
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 単元未満株主の権利制限について

当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款で定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第52期）（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

2018年6月27日近畿財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付資料

2018年6月27日近畿財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第53期第1四半期）（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）

2018年8月2日近畿財務局長に提出

（第53期第2四半期）（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）

2018年11月2日近畿財務局長に提出

（第53期第3四半期）（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）

2019年2月4日近畿財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2018年6月27日近畿財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

2018年9月21日近畿財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号（代表取締役の異動）に基づく臨時報告書であります



## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月12日

西菱電機株式会社

取締役会 御中

## 有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 伊 東 昌 一 ㊞

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 中 田 信 之 ㊞

### <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている西菱電機株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、西菱電機株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### <内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、西菱電機株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、西菱電機株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

# 独立監査人の監査報告書

2019年6月12日

西菱電機株式会社

取締役会 御中

## 有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	伊	東	昌	一	Ⓔ
--------------------	-------	---	---	---	---	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	中	田	信	之	Ⓔ
--------------------	-------	---	---	---	---	---

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている西菱電機株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第53期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、西菱電機株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象には含まれていません。